

魔法少女規格 —Magic
Girls Standard—

青川トーン

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

(旧題：魔法少女なら無料)

・滅びた異世界でダークでソウルとかドゥームだったりみたいな感じで冒険したり敵と戦ったりするよ！

・基幹はアーマードでコアだったりタイタンでフォールだったりな雰囲気魔法少女です。

世界は荒廃しているし、体は闘争を求める。

ついでにイレギュラーは許されないので新しい資源を求めて異世界に出たりもする。

■この作品は魔法少女規格（<https://wiki3.jp/MagicGirlStandard2>）の世界観や設定を流用して書いております、若干違ったりしたりもするけど参考程度よろしくおねがいます。

目次

1	キアラ設定／用語／CHAPTER	62
	chapter 1	55
	chapter 2	47
	chapter 3	41
	chapter 4	33
	chapter 5	26
	chapter 6	18
	chapter 7	10
	prologue	1
	campaign Mode	
	Chapter	

	chapter 8	124
	chapter 9	117
	campaign Mode	
	Chapter 2	
	chapter 10	110
	chapter 11	102
	chapter 12	95
	chapter 13	88
	chapter 14	82
	chapter 15	75
	chapter 16	69
	campaign Mode	
	Chapter	

c h a p t e r	c h a p t e r	c h a p t e r	t e r 4	C a m p a i g n	c h a p t e r	c h a p t e r	c h a p t e r	c h a p t e r	c h a p t e r
4	4	4		M	3	3	3	3	3
				o					
0	0	0		d	0	0	0	0	0
3	2	1		e	7	6	5	4	3
				C					
				h					
				a					
178	171	164		p	158	150	143	136	130

C a m p a i g n M o d e C h a p t e r 1
p r o l o g u e

ありきたりな言葉だが、戦場で最も重要なのは勝利し、生き残る事である。

自らの為に生きる傭兵であるならば、特にだ。

その為に必要なのは、正確な情報と勝ち馬に乗る慎重さ、そして力だ。

誰よりも素早く動き、敵を見下ろして優位に立つ、時には背を向けて逃げる事も重要だ、臨機応変に対応しなければすぐに死んでしまう。

レールガンの弾丸がシールドごと装甲を貫通し、爆裂した弾頭が戦車を屑鉄に変えて随伴していた歩兵を諸共に吹き飛ばす。

この世界に絶対なんてものはない、だが力さえあれば、少しばかり生き残れる確率は上がる。

『さすが魔法少女だ、助かった!!』

信頼性のある高性能な装備、最新鋭のテクノロジー、あるいは古き魔術……なんだつていい。

己の信念に従い、金と名誉を得る、「生きる」為にならオレ達は何でも使う。

汚染された砂塵で見通しのつかない彼方から「魔力性」の稲妻が次々と降り注ぐ、全面にシールドを展開しながら即座に側面に回避しつつビルを盾にする。

銃声と爆音、叫び声の中から自分に必要な音から情報を選ぶ。

問題はただ二つ、相手に当たるかと当たったとしてそれで殺せるかだ。

ユニオンの魔法少女は腹立たしいながらも優秀だ。

才能に溢れる由緒正しき魔術師とやらが、コスト度外視の装備で来るのだから当然でもあるのだが。

レールガンの残弾は問題無い、今回の戦闘においてこちらの魔法少女はオレ一人。

残念な事に逃げれば相当な被害になる、別にどれほどに犠牲が出たところで顔見知り一人居ないから心は痛まない、けれどオレの信用は落ちる。

逃げるにしてもある程度戦って役目は果たさなければならぬ。
つまりは貰った金の分は働けという事だ。

『敵の魔法少女を目視！ポイントB5から東に向かうぞおっ!!』

それはオレだけに限った事ではない、他の兵士もだ。

斥候の情報を頼りに建造物を壁にしつつ移動、道中の索敵ドローンを蹴り壊し、ユニオンの歩兵の背後を取り素手で始末していく。

ドローンは壊しておかねばこちらの位置が知られるし、敵は一人でも多く殺しておくだけでも後が楽になるし、報酬になる。

『ポイントE9に敵魔法少女！早くしろおっ！』

ようやく敵の姿が見える、武器はライフルタイプ、色は紺色、髪はオレと同じピンク、その意匠が「花（フルラージュ）」でない事に一つ安堵しつつも先手と背後を取れた事を幸運に思う。

距離は1.3 km、照準は目視、引き金を引く。

振り返った相手と目が合う。

これだから魔法少女の相手は嫌なのだ。

音速を超える弾を回避するのはやめてくれ、そしてそのまま反撃してくるな。

向こうの狙いが甘かったおかげで当たらなかったが、魔力で出来た稲妻の銃弾が3発飛んできた。

アレにナメた射撃は当たらない、後退しながら二射目は向こうを牽制するために使う。

威力ならこちらの方がいるのだから近づく必要はない、不安要素は削るに限る。

インパルスタイプ譲りの自慢のステルス性と速度で移動しながらビルを遮蔽物とし、射線を切る。

ここまで近づけば魔力で位置はわかるし、レールガンなら遮蔽物を貫通して攻撃できる。

三射目の引き金を引く、コンクリートを破砕した音と共にバリアコーティングに着弾した甲高い独特の音が聞こえた。

幸いにも命中したが、残念ながら壁越して威力が低下した分大きなダメージにはならなかった様だ。

まだ多少の手傷は負わせたが敵は動いている、四射目の引き金を引こうとする、が同時に魔力の高まりを感じる、急いで右方向移動し、視線を外さずに距離を取る。

稲妻とは比較にならない光の奔流がビルを溶かしながら横薙ぎに振り払われるので上昇し回避、光線で溶断されたビルが崩壊していく。

レールガンの様な高反動武器は特性上足が止まりやすい、となると射撃時を狙うのは当然。

経験が活きた、あれに当たれば即死とは言わずともバリアコーティングで耐え切れるかといえはば半々、それに間違いなくレールガンは吹き飛ばされていた。

並の任務の報酬よりも高いこいつが壊されるのはとても困るのだ。

まあ命とどっちが大事かといえれば命を取るのだが。

ともかくまだ終わってない、あのぐらいの威力ならおそらく向こうもまだ撃ってくる筈だ。

先ほどよりも高度を取りながら次のビルを壁にする。

かつては栄華を誇ったこの都市も汚染によって放棄され、交戦許可区域となっている。

まあおかげで盾にはまだ困っていない。

「なによ……逃げ回ってばかりで！誇りはないのかしら……！」

耳が相手のぼやきを拾う、威力は一人前のようなだが、挑発は安すぎる。

煽れば引つ張り出せるかもしれないが、能力の高さと実績とプライドの塊みたいな連中に火をつけると碌な事にならないから堪える。

それこそ嫌になるほどに、奴らは優秀なのだから。

息を止め、音と熱を拾う。

戦況は不利寄り、味方の支援は、期待できそうにないが……目はある。

残弾は3発、リロードしている暇はない。

向こうも二度も同じ手は食わないだろう、上昇し、相手の上を取って引き金を引く。

いくらシステムや魔術で強化されていても人間の感覚である以上、私達でも縦の動きは横や前後の動きよりも少し捉えにくくなる。

シールドで逸らされたとはいえ狙い通りに当たった。

教本通りの動きとは言うが、間違いなく効果的だからこそ教本に書かれるのだ。

二射目を欲張らず急いで降下、稲妻が頭上を通り過ぎる。

防御も狙いも正確すぎる、腕前が高すぎる。

なんでユニオンの魔法少女どもはこんなに凶悪な性能なのだ。

だが、加速して降下しながらも狙いを定める。

これでどうか落ちてくれと願いながら引き金を引く。

再びビルを貫通して破砕音と着弾音が聞こえた。

だがそれはバリアアコーディングではなく、シールドへの着弾音だ。

「ウソだろ!？」

驚愕を思わず声が出てしまう、シールドは確かに強力だが強度を出す為にエネルギーを多く放出し、消費する。

その為に魔法少女であっても瞬間的に出すのが基本、出しっ放しは損であり、逆に不利となる。

つまりはこちらの攻撃が読まれ、ピンポイントで防がれた。

即座にフローティングの指向性を上に向け、急上昇。

体にバカみたいな負荷が掛かるし意識が飛びそうになるが耐える。

真下をビルを貫通して光線が薙ぎ払う。

「やりましてよー！」

あのクソアマ本当にバケモノか。

残弾は一発、これ以上後退しても状況はどうにもならない、選択肢は一つ。

崩壊し、降り注ぐビルの残骸を回避しながら加速して、距離を詰めつつ照準を合わせる。

これ以外に手はない。

目が合う、距離1メートル。

ピピピと、通信機のアラームが同時に鳴る。

互いの銃身がぶつかり、止まる。

『時間だ、善戦したが今回は我々の負けだ。引くぞ魔法少女』

『時間です、統一軍の兵士は戦闘を終了し帰還してください。追撃の必要はありません』

互いの通信さえも聞こえる距離。

ルール上、戦いは終わりだ。

撃てば相手を殺せるが、名誉を失う事になる。

そういう規則なのだ。

これは人間同士の戦争であり、この時代の戦争にも最低限度守るべきルールがある。不服そうな顔でこちらを睨み付けるユニオンの魔法少女との間に沈黙が流れる。

「撃てれば、わたくしの勝ちだったのに」

「そうだな、撃てればな」

命拾いしたのはオレだ、こいつの言うとおりレールガン銃口の銃口は逸らされていて、相手のライフル銃口はオレの頭を捉えていた。

この距離ではバリアコーティングの防御があろうと死ぬだろう。

「……エリル・フィア・エルルート、わたくしの名前ですわ。あなたも名乗りなさい」

「No. 9 (ナイン)、それ以上の名前は無い。ただの傭兵だ」

「ユニオンに來なさい、あなた程の技量があれば引く手は多くありませんよ」

「甘いな、あんたは。だけどそれは出来ない、アライアンスの自由(くうき)が気に入ってるんだ」

「……やっぱりあなたもそういうのね、なら次は必ず討ちますわ。ユニオンが作る平和(ちつじよ)の為にも」

「なら次は勝つさ」

もう会う事もないかもしれないし、また会う事があうかもしれない。

魔法少女の戦死する確率は他の兵士に比べて格段に低い、とはいえ戦場に絶対はない。

むしろ現在の戦場では危険性から、特に優先して攻撃対象となる。

それに戦場となる場所を違える事も考えれば、互いに二度と会う事の無い確率の方が高い。

「それでは、また」

「ああ、またな」

オレは背を向けアライアンスの撤退地点まで撤収する。

不思議と、奴とはまた会う気がした。

chapter 1 | 01

魔法少女システムには、それを運用する為の人間が必要である。

つまりは少女の部分が必要になる。

無人機化やホムンクルス、あるいは兵士の改造などによる少女化など様々な代替手段が考えられ、一部は既に実用化されているものやはり一番安いのは孤児などから志願者を募った「人間の雇用」だった。

それがライアンスを初めとした多くの勢力で運用される「魔法少女傭兵」だ。

当然ながら中には人道に反する扱いを受けたり、拉致され被検体となった者がいる。

オレもまたそうだった、改造によって記憶を失い、過去を失い、帰るべき場所を失った。

もしもその組織がライアンスによって潰される事がなければオレはずっと被検体のままだっただろう。

残されたのは被検体 No. 9 (ナイン) という名と命だけ。

ライアンスの保護施設で教育を受けながらも、何のために生きればいいのかわから

ず無為に日々を過ごしていたオレを救ってくれたのもまた、魔法少女であった。

アライアンス最初の魔法少女であり、今尚最強の座にいる魔法少女「ソニックインパルス」の戦闘映像、それがオレに力への憧れを与えてくれた。

魔法少女の資格者となるには「ライセンス」が必要であり、「適性の検査」「模擬戦闘」「面接」の三つの試験を突破する事により、アライアンス勢力下での魔法少女の活動を認められる。

オレは難なくそれを突破し、適性によりレイディアント社からの採用通知と「ファーフニルモデル・サイレントインパルス」の支給を受ける事が出来た。

初めて飛んだ空は、驚くほどに美しかった。

そこでオレは初めて自由というものを知った。

だが当然ながら、魔法少女システムの提供を受けるという事は「仕事を与えられる」という事でもあった。

初仕事の時の事は良く覚えている、輸送機で運ばれる中、まるで時間が永遠に引き延ばされたかの様な緊張の中にあった。

新人であるオレをサポートする為に雇用された「先輩」はそんなオレを見て、「あーわかるわかる」といった感じで穏やかに笑っていた。

簡単な仕事ではあった、アライアンスの勢力下にある犯罪組織や反政府団体などの始末、なんなら魔法少女すらいらぬ楽な仕事とは説明されていた。

今思えばオレは限りなく運が悪かったのだろう。

そこはユニオンや他勢力へ技術や情報を流出させる裏切り者どもの巣窟だった。

防衛戦力への対応中に突然、制圧部隊からの通信が途絶え、施設の壁を吹き飛ばして現れたのはユニオンの魔法少女だった。

それも最悪な事に、アライアンス側にかなり警戒されていた魔法少女の一人だったと聞く。

ただの治安維持任務と思っていたオレ達が敵うわけもなく、部隊は壊滅、敗走する者は残らず殺されていく。

そんな時だった、彼女がやってきた。

響希ハヤテ、ソニックインパルスの魔法少女であり、アライアンス最強の魔法少女だ。部隊の不利を悟ったレイディアントの指揮官が自費で依頼して、間に合わせたのだ。

その戦いは圧倒的だった、色とりどりの魔法をブレードとその身のこなしで捌き、突然姿を消したかと思えばユニオンの魔法少女の後ろを取り、丁寧に武装を破壊して剥いでいく。

そして生かしたままに戦力を削りきり、施設に居た生き残り諸共に捕虜とし、後続部

隊に引き渡して去っていった。

帰りはアライアンスに所属する傭兵が憧れ、畏れる最強の魔法少女の戦いを目の前で見て、生きて帰れた事で持ちきりだった。

オレは憧れた、アレだけ強ければきつと、誰よりも自由に、誰よりも幸せに生きられるのではないかと。

だからオレは目指した。

幾多の戦場を潜り抜け、屍の道を踏み越え、力を磨いていった。

だがその度に思い知らされる現実、死に掛けた事など数え切れず、ユニオンの魔法少女に敵わず背を向けて逃げた事だってあった。

そしていつの間にか、オレは今の自分に満足してしまっていた。

傭兵としての安定を取ってしまったていた。

恥にならない程度、名誉を求めない程度になってしまっていた。

公園のベンチに腰掛けて、時間を無為に過ごす。

体を機械に置き換えて、それをファッションとして着飾る者もいれば、オレと同じ様な魔法少女や傭兵、あるいはただただ平穩に過ごす一般的な労働者……様々な者達が自由に行きかうのをただ眺めていた。

ドームの天井の照明がすっかり薄暗くなって夕暮れ時。

今のオレは、この街の様に閉ざされた世界で、今ある自由だけで満足してしまっていた。

「隣よろしいですか？」

「かまわない」

オレの隣に一人の魔法少女がやってきた。

青い目、紺色のロングコートの様なジャケット、水色の髪、手に持つのはライフルケースだった。

おそらくジャケットの下に魔法少女衣装を着ているのだろう。

だがそれだけじゃない、この距離でなら分かる。

こいつは内側まで魔力が浸透してる、つまりは魔法少女でありながら魔術師だ。

アライアンスにも魔術師は居る、だがその数は驚くぐらい少ない。

ユニオンならまだしもアライアンスで魔術師である魔法少女はほぼ居ない、唯一例外が企業の上役であつたりだ。

恐らくアライアンスの魔法少女じゃない。

「何処から来た？」

「え、ああ。日本からですよ」

日本、ユニオンにもアライアンスにもあまり肩入れしていない中立勢力の国家か。

確か日本の魔法少女は政府直属が殆どの筈だったと聞いている。

見るところ護衛どころか仲間すらいない、一人だ。

「旅行か」

「いえ、仕事ですよ。……ああいう奴です」

指差した先には街頭モニターに浮かぶ「資源開拓事業」の求人広告。

文字通り「異世界」へと有用な資源を調査・採掘しに行く仕事だ。

開拓には「未知」という大きな危険が付き纏う、それだけでなく同業者との衝突や横取りの危険性もある。

とはいえ、危険が伴うとしてもそれを止める事は出来ない。

もはやこの星の資源は枯れ果てつつあるのだ。

未だにアライアンスとユニオンが戦争を続けられるのは、こうした資源開拓が行われているからだ。

「うちの政府も調査や採掘はしているんですけどね、まあちよつとそこが顔の合わせたくない身内が多くて……こうしてアライアンス側まで出てきたって訳です。

「それはいいのか？ 仮に有用なモノを見つけれられたとしてもそれを国まで持ち帰れるとは限らないぞ」

「あ、別に私が探しているそれは日本に持って帰る必要はないし、なんならアライアンス

やユニオンが使ってくれるとありがたい奴ですね」

少女がポケットから携帯端末を取り出し、一つのファイルを投影する。

『環境再生浄化計画』

そこには簡潔にそれだけが書かれていた。

「まあほら？汚染はどこもどこにかしたいですからね？」

「なるほどな、納得がいった……それでオレに近づいたのは」

「雇われませんか？報酬はそうですね……新しい力、なんてどうですかね？」

投影されるファイルが変わる、そこに浮かんだのは魔法少女の衣装、それも一つや二つではなく凄まじい数の画像ファイルが表示される。

オレは呆れた顔をしているだろう。

「こつちが本題だろ」

「そうともいいますねー」

こいつは仕事を隠れ蓑に設計した魔法少女システムをテストしたいだけなのだ。

日本から態々出てきたのも、恐らく予算が下りなかったか、計画の承認が得られなかったからだ。

俗に言うマッドサイエンティストかそれに類するアレだ。

そんなに目を付けられてしまうとは運がなさすぎる。

「ちなみに拒否してもいいんですよ？その場合……まあ面白い事になってもらいますけれど。主に私の魔法で」

「事実上の脅迫はやめろ、わかった受ければいいんだろう」

「やっぱり期待した通りでしたね、ナインさん。さすがハヤテさんが選んだ魔法少女です」

今、とても聞き捨てならない名前が聞こえた。

ソニックインパルスである時こそ有名であり、戦場でその姿を見る事のある響希ハヤテだがプライベートで関係のある人間、というのは極端に少ない。

「いい加減名乗ってもらえないか、一方的にだけ知られているのは気味が悪い」

「そうだねー名乗り忘れてたよ。私はナユタ・ハレル、まあちよつと身内経由でハヤテさんと知り合ってね〜いい感じの傭兵さんの推薦を頼んだらあなたの名が出てきたわけなのですよ」

ナユタ・ハレルと名乗った魔法少女はその人懐っこい笑みと裏腹に、どこまでも透き通った青い瞳でこちらを見ついていた。

chapter 1—02

『エンジンエルモデル』

それはこの世界で最も普及している魔法少女モデルだ。

日本で開発、配備された世界で最初の魔法少女モデルであり、他には開発に出資・参加していた組織や他国政府などに提供された。

適性はほぼ不要、必要な機能が全て揃っており、コストも低い、シンプルでスタンダードな使い心地、そしてなにより途方も無い拡張性があり、今現在も無数のバリエーションを生み出し続けている。

魔法少女システムの構造はこの時点でほぼ完成しており、コアと拡張用のコネクタユニット、内部のインナースーツの三つにコアに搭載された「バリア」「シールド」「パワーアシスト」「フローティング」の基本機能魔法を搭載。

そして動力とするのは「人造の神」だ。

「私達「ナユタ」は古くからこの「人造神格」を運用して妖魔や怪異、時には神にも立ち向かう巫女と神官の組織でした。ですが時代の移り変わりと共にまあ、その粗方殺しつ

くしたというか……敵が減ってしまいして研究者としての側面が強くなっていきまして、自分達が使ってきた「人造神格」の力を調べる為にこの『魔法少女システム』は作られました」

レンタルガレージの中、整備の為の機材を組みなおしながら目の前の少女、ハレルは嬉々と語る。

普段使いの端末に、加工用の出力機、投影用のモニターに、コア加工の為の素材を積み上げる手際はあまりに華麗だ。

「ですが血の気は多いし倫理感は無いらしい、基本的に神に喧嘩を売るような連中の集まりです。まあ出るわ出るわ裏切り者に離反者、その一部はアライアンスやユニオンへ行ったりしてこの魔法少女の技術を広めていったわけです」

「つまりお前達ナユタが全ての元凶という訳か」

「まあそうですね。とはいえ遅かれ早かれ技術の流出は決まっていますからね。結果としてエイゲツのお兄さん……ああ、神官で魔法少女システムの「開発者」の人がちよつとメンタルをやっちまったのと、過激派が大分減ったぐらいで済みましたよ」

全く悪びれる様子なく作業を進める彼女を見てるとナユタという組織のイメージがなんとなくつく、技術の進歩の為に犠牲は仕方ないという奴だ。

間違いなく、ルールで縛らないと平気で危険物を作り出すし、ルールの穴をついてく

るタイプの奴らだ。

オレが思い浮かべるのは「OASISテクノロジー」の連中だ、アライアンスの中でも特に生体技術に特化している企業で、生体再生や改造手術などといった多くの医療技術を生み出した。

実態としては幻獣や生物兵器の培養でよく事故を起こして被害を出す傍迷惑な連中だ、もちろん後始末はオレ達、傭兵に丸投げだ。

「悪い人ばかりではないですよ、倫理感が無いだけで」
「それを一般的に悪い奴というんだ」

「まあ、それはおいておいてセッティングは完了したので、さっそくアセンブルを行いましょうか！」

そんなことはどうでもいいと話を投げ出し、ハレルは端末を起動、ホログラムモニターに浮かぶのは魔法少女モデルの設計データだ。

「第二世代型モデルってご存知ですか？」

「フォームエンジを初めとした拡張性を更に高めたモデルだろうか？まだそんなに出回っていないと聞いている」

「そうですね、アライアンスやユニオンでも一部のテストタイプが出てきたばかりとい

う感じですよ。ベルトやコアに電子魔法陣を組み込んでタッチだけで魔法を使える様にしたりとかぐらいですかね、今の所は」

魔法少女システムが登場・普及し既に3年経っている、となればある程度扱いに慣れて技術も蓄積してくるといふもの。

新型の開発もまた進み始めているという噂もよく聞く。

「これはエンジェルモデルの第二世代型です。既存機のコアにアップグレード処置を施したもので、一部の組織ではもうこれにアップグレードが始まっています……が、私はこの程度の無難なパワーアップで満足したくありません」

「……いくら強くても使用者の事を考えないモデルは使い物にならないからな」

「わかってますよ！釘を刺さないでください！むしろ更に使いやすくする為の設計なんですから！」

むっと不機嫌そうな表情を浮かべ、次のファイルが開かれる。

そこに浮かぶのは「使い魔」の文字。

「日本でいえば式神、魔術師的に言えば使い魔、工学的に言えば人工知能。つまりは魔法少女をサポートする為のシステムです。ドローンや戦闘端末を使ったり、ハッキングや機器の運用補助、果ては戦闘中の助言なんかも視野に入れてます」

「……使い魔といえば魔法少女無人機とかのアレか」

「そうですねサーヴァント・オートマシンの。魔法少女システムにロボットを少女と誤認させて動かすアレの元です。むしろアレほどには戦闘をメインとさせる訳ではなく、簡単に魔法少女の負担を減らすものです」

おもったよりもまとまな改善案だった、確かに戦場の魔法少女にはやる事が多い。

索敵も武装や機器の操作も、戦闘の判断もほぼ自分一人でしなければならぬ事も多い。

これが実用化すれば、確かに負担は大きく減るだろう……が。

「そうか、だがこいつがユニオンの手にも渡ればどうなる？」

「心配しなざるな、どうせ向こうも作ってるしアライアンスでも作り始めてるのでどの道、戦場で見る事になりますよ。所詮小娘一人が考えうる程度のカスタムは大きな組織ならどこでもやっているので気にする事はありませんよ」

ハレルはそれが当たり前の様に言い切り、次のファイルを展開していく。

わからない、オレにはこいつの目的がわからない。

「ナインさんにはね、一緒に旅について来て貰いたいのですよ。私には新しい世界で、新しい発見をする為の仲間が必要なのです。だからハヤテさんに聞いたのです、アライアンスで誰かいい感じの魔法少女がいないのですかって」

「それは……」

響希ハヤテ、アライアンス最強の魔法少女からオレが一定の評価を受けているというのは初耳であり、変な気分であった。

確かに彼女であればアライアンス内の魔法少女に注視しているのは当然であろうが、何故オレ程度の魔法少女がという気持ちもある。

「つまりは人間同士の戦いに飽きてそうな人を探してたわけなんですけどね、ちよつとした気分転換の旅行気分です。旅は道連れ、世は情けという言葉もありますからね。ついて来てくれませんか？新しい冒険に」

……?……!!

「……つまり護衛が雇いたいが払える金がないから魔法少女システムのカスタマイズを報酬にしたいという訳か」

「はい」

「それを最初はソニックインパルス、つまりは響希ハヤテに持ちかけた」と

「はい」

オレは理解した、ハレルの人のよさげな笑み、これは。

何も考えてないアホ面だった。

「……お前は身内からバカとか言われぬか」

「失礼な、そんなことありませんよ!!」

頭を抱える、一瞬でも警戒に値する存在だと思ったオレがバカだった。

こいつはただのアホでバカだ。

それも無駄に技術や力だけはあるタイプのだ。

加えて放っておけばそれはそれで何をやらかすかわからない。

「……後払いでもいいからちゃんと金で払え、それを条件になら受けてやる」

「後払いでいいんですか!?!じゃそれでお願ひしますね!」

「説明はするから、ちゃんと契約書を書けよ?最初の期間は3ヶ月、更新するかはその時に決める」

いざという時はこいつの実家に請求書を送れば問題はないだろう、

にしても魔法少女だというのに年相応の気楽さには少し羨ましくなる。

どいつもこいつも大人びている奴ばかりで、逆に新鮮だ。

「そういえばお前の歳はいくつだ」

「私は今年で15ですわね、今は14です」

「ガキじゃねえか」

「魔法少女なんでガキじゃありませんよ!」

まったく厄介なガキに捕まってしまった、本当に恨むぞ、ハヤテ氏。

「とにかくまずは仮契約からだ、オレはまだお前を雇用主として相応しいか見極めきれ

てないからな」

chapter 1 | 03

ニヴルヘイムとは北歐神話の中の九つの世界において霧に覆われた暗き地、あるいは死者の地ヘルヘイムと同一視される場所の事だ。

ここはその「ニヴルヘイム」と名付けられた文字通り「異世界」だ。

物理法則が異なれば魔術の法則も異なる、気温は低く大気組成もまた生物が活動するには不向きといえる。

防護服を着た魔術師や無人探査機、そして魔法少女でもなければまず満足に動く事すらままならない。

最初にここを見つけたのはユニオンの前身となった組織だった、汚染による居住地の不足から新天地を探索計画の中でこの世界を見つけたものの、人間が住むには向かない環境だと簡単な調査だけ行われ放置されていた。

その後、世界間転移技術を完成させたアライアンスが再発見、それなりにコストをかけた調査が行われ、資源採掘地として有用だという事で開発が始まった。

だが同時にユニオンもこの地に目を付け、この地の資源を巡った抗争が始まった。

現在ではそれなりの人数の人間が居住スペースを作り暮らしている。

薄暗い空へと伸びる塔「エレメントハーヴェスター」が今日も元気にこの地から資源を採掘していた。

とはいえこの世界にも生命は存在する、竜や獣、植物……かつてオレ達の世界に満ちていたモノに近い生物がひしめいている。

それらはどうにも気性があらく、採掘施設などを襲う事もあるが……魔法少女や魔術師、あるいは無人機が持つ武器のテストにはうつつけの相手となっていた。

オレ達がやってきた時には丁度、襲撃があつた後らしく、職員や魔術師達が仕留めた獲物の解体を行っていた。

魔術的な素材として優秀なのだそうだ。

「うわーすっごい……人間の業の深さを感じますね」

「オレはお前の方が怖いよ」

「私は師匠とその無茶振りが一番怖いですね、後はそんなに」
「大した奴だ」

新型の銃器によって穴だらけにされた巨大な猪の死体を一瞥する、その傷はまるでくり貫かれたように蒸発していた。

連射式のプラズマガンか何かだろう。

「そういえばうちの実家の近くにも猪はいましたね……ちよくちよく襲われて人死にが出るんですよ」

「対策はしてないのか」

「シヨボい火器じゃ通らないんですよ、最近プラズマライフル使えるマタギの魔法少女が就任しましたけれど、どうなってるのかはまた今度調べておきます」

地球の自然は殆ど汚染により失われた、かの様に思われるが、実際の所そうでもない。星全体で見ればまだ自然は残っている……だがそれが「人間が生存可能である環境」であるとは限らない。

神域・聖域化などと呼ばれ、魔力や化学汚染、あるいは何かしらの神秘の力が働き、非常に強力な生物種が跋扈する領域となる汚染区域もまたあるのだ。

このニヴルヘイムの動植物がそういった聖域の生物とよく似ている事から、ここはかつて地球と地続きであったのではないかとという論もある。

もつとも、アライアンスにとつてもユニオンにとつても、ただの資源採掘所としか見られていないという悲しい現実があるのだが。

「それにしてもタイミングが良くなかったですね、試し撃ちが出来ると思っただんですが」「少し遠出すれば直ぐにでも的は見つかるぞ」

「いえ、「今は」やめておきましょう。この世界もなんだかんだ言っただけアライアンスもユ

ニオンも「全部」は知らないのでしょうか？」

ハレルの言うとおり、アライアンスやユニオンが完全に把握できているのはせいぜいそれぞれの基地から30キロ圏内だ、電波状態が極限まで悪く、それ以上は単独調査になり不測の事態が起きやすい。

アライアンス・ユニオン共に資源開発の為に施設の拡張を行いたいという欲はある、だが人手が慢性的に足らず、並の人間は世界を移動したストレスで直ぐに潰れるので長期的には働けない。

それが現状が維持されている理由である。

「なるほどな、で。そもそも何のためにこのニヴルヘイムに？」

「素材集めの為に竜を狩ります」

「魔法少女モデルのコアを新造するつもりか」

竜、それは架空の存在とされていたがこの世界を含め、多くの異世界に存在する特殊な生物種だ。

魔術的素材としての価値は高いが、相応に強く魔法少女でも油断できない相手だ。

オレの使用しているファークニルモデルもまた竜を素材とした魔法少女モデルだ。

それは生体適合によって、竜種の優れた感覚・身体・魔術的な能力を人間の体に取り込む事で自身もまた竜になる為のもの。

つまりはハレルは新しい魔法少女モデルを作る為に竜の素材が欲しいようだ。

「魔法少女モデルもピンからキリ、それこそ機材すらなくても携帯電話端末一つあればエンジェルモデルのコアを作る事もできましようが、やはり相応に強いモデルを作りた
いなら相応の素材があった方が楽というものです」

「いや携帯電話端末でコアが作れるのは初めて聞いたが……」

「ナユタの巫女や神官なら出来ますよ？ 師匠以外は」

「それってつまりお前にも出来るという事か」

「はい」

少し頭が痛かった、確かに魔法少女システムの「コア」は比較的簡単に作れるとはい
え、それなりの知識と専門技術が必要だとは聞いた記憶がある。

それに専用の加工やカスタマイズの機材も必要だと。

つくづく規格外、むしろ規格を開発した側だが……ナユタという組織は何かおかし
い。

「なんなら私の使っているモデルも自家製ですよ、エンジェルモデルのカスタムですが」
「既製品で悪かったな」

滅茶苦茶得意げに胸を張るハレルに頭が痛くなる。

「でも私が竜狩りって言った瞬間にコアの新造に行き着いたナインさんもすごいと思

ますよ？結構みんな自分の使うモデルのクセなんかは知ってるのにシステム基幹部とか素材材までは知らないって感じでしょう？」

「戦場で使える知識はそれなりに知っているつもりだった、お前と言う非常識と出会うまではな」

「それほどでも」

「皮肉だよ」

さすがはナユタといったところか、こいつの技量や知識はやはり本物だろう。

先日アライアンスに問い合わせた情報からこいつが本物のナユタ・ハレル、つまりは魔法少女システムを開発した組織の一員である事の裏づけは取れた。

正規の手段でアライアンスに入ってきた為、普通に立ち入りの記録に残っていたのが決め手だった。

もつとこう、訳アリらしく裏口や非正規の手段で入ってきたと思っていたのだが。

それはともかく、一つ気になる事が出来た。

「それでそんな天才のお前の作ったエンジェルモデルと市販のエンジェルモデルはどう違うんだ？一応一緒に行動するのだから戦力の把握は必要だろう」

「あ、そうですね。まあ出力から違うのでエンジェルモデルというよりその原型である「ヘブンスハート」というモデルに近いのですが、限定的にですが不死の生物を殺したり

できます」

また頭の痛くなるワードが出てきて、オレは突っ込みたくなる衝動を抑え殺した。

「そういう特殊すぎる能力でなく、もつと普段使いする能力を聞かせて欲しかった」

「それなら、簡単な武装の組み立てとかいわゆるフォームチェンジ機能で他の魔法少女

コアと連結させたりとか」

「さっきよりはマシだがまた変なワードが聞こえたぞ」

オレは早くもこいつとの仮契約を解消して別の仕事を探したくなってきた。

ユニオンの連中とやりあう戦場が恋しい気分だ。

chapter 1-04

ニヴルヘイムの空に太陽はない、帯電した有毒の雲に覆われ、昼も夜も変わらず薄暗いままだ。

必要最低限度の荷物と武器を持ち、オレ達は黒い森の上を飛ぶ。

地上の居る獣との遭遇とそれによる無駄な戦闘を避ける為だ。

現在の距離は拠点から北に19キロ、システムの保護機能のおかげで今の所は問題なく活動できている。

しかし調査も進んでない未知の領域には変わりない、常に感覚を研ぎ澄まし警戒を続けている。

……のだが、それにくらべて目の前のバカ……もといハレルは全くの自然体だ。

「もう少し緊張感を持つたらどうだ」

「辺に緊張感や殺気を撒き散らすと無駄に反応されますよ？」

「まるで歩き慣れしてる様な言い方だな」

「そりゃ、昔師匠に連れられていった場所よりはここは遥かにマシですから」

「なんだそれは、地獄か魔界か？」

「似た様なものです、デーモンとか住んでましたからね」

それが冗談なのか、妄言なのか、はたまた事実なのか確かめる術がないので放っておくしかない、呆れて溜息を吐く。

オレの武装はレールガンに加えて電磁グレネード、それに対してハレルは身の丈ほどのブロードソードだけだ。

しかもそのブロードソードは施設の廃棄資材置き場の工業用カッターを転用した急造品だ。

「そんな武器で大丈夫なのかよ」

「大丈夫じゃなかったらその時はその時で別の武器を作るし、魔法もあるので」

本当に大丈夫かよ。

オレとしては不安しかない。

「それよりも、もうすぐ戦闘になりそうなので用意をお願いしますね」

ハレルはそういうとブロードソードの手をかける、まだオレの感知する距離にはそう大きな力を感じないというのに、この見通しの悪い中でもう「見えている」ようだ。

「わかった、それでその根拠は」

「外付けの強化感覚器です、信じてください」

ハレルが被っていたフードを外す、額にある二枚一対の角の様な羽「フェザーホーン」

つまりはセンサーの一種だ。

「なるほど、わかった」

さすがに危険になる冗談は言わないだろうと、一先ずは信じて見る事にする。

オレの強化された感覚よりも正確な可能性もありえるだろう。

誰しも同じ色が見えているとは限らない、他者に見えない色が見える者もいる。

となると後は信じてみるしかない。

「火が来ます、注意してください」

ハレルの声に続き、正面から凄まじい勢いの火の玉が飛んでくる。

それを上昇し回避しながら凝視する。

うつすら、その姿が見える。

色はグレー、一對の羽、四本の足を持ったトカゲ、つまりはドラゴンの姿だ。

サイズは5メートル程度、そこまで大きな個体ではないが、それなりに早い。

レールガンを構え、銃口を向ける、するとすぐに地上の森の中に姿を隠す。

目もいようだが……その程度は隠れたの範囲に入らない、引き金を引く。

木々と土を吹き飛ばす音がしたが、どうやら外したようだ。

弾道が少し低い？ それに加害範囲も随分狭い。

「ナインさん？ 環境が違う事をお忘れなく、威力減衰です」

「なるほど……どういうことだ」

「レールガンもプラズマも霧散しやすい場所だつて事です、さっきの猪の死体も普段のプラズマの威力なら丸焼きですよ。誤差も積み重なればなんとやらです」

詳しい計算まではわからないが、少しの違いが大きなズレを呼んでいるわけか。なるほどつまりこいつ。

「ブロードソードを持ってきたのは」

「そうです、ガバリ安い射撃武器よりも誤差が少ないからです」

「ならそれを言え、それを」

環境が悪いなら悪いなりにやり方はある、完全に無力化しているわけでは無く効くには効く筈だ。

狙いの誤差を目視で、コアからレールガンに供給される出力を手動で調整する。

そうしているうちにもドラゴンはこちららへと森の中を飛びながら向かってきている、障害物を避ける為にスピードは落としているようだがそれでもまだ十分に早い、飛びなれているのだろう。

「ああ、それとさっきも言ったとおり素材にするので羽や手足を狙って潰してください、絞めるのは私がやりますので」

「わかってる」

魔法少女や人間を相手するのはまた別の緊張感だ、動きの読みがまた難しい。避けるのかと思えば木を薙ぎ倒し、茂みの中に入ったたり、他の生物が視界に映りこむ。燻り出すか。

進行方向を予測し、少し早めに引き金を引いてレールガンを撃ち込む。

一射目で遮蔽物を吹き飛ばし、続けて放つ二射目を本命として撃つ。

思ったより木が頑丈ではあったが、一瞬視界が開けた上に弾丸が目の前に着弾したドラゴンはさぞ驚いただろう、思わず上に飛びあがり、こちらに火の玉のプレスを吐いてきた。

それをハレルが迷うことなくブロードソードで斬り捨てて防御、遮蔽物がなくなった事によって狙いが付けやすい。

胴体より照準を合わせて、引き金を引く。

空を切り、衝撃がドラゴンの胴を削ぎ翼をもいだ。

翼もがれたドラゴンが地に落ちる、それを狙ってもう片方の翼も撃ち抜いて使い物にならなくする。

時々、片翼だけで飛ぶドラゴンがいて聞くと念のためだ。

「ナイスショット、狙いは正確ですね」

「最近少し自信を無くす事があったがな」

「まあそれは相手が悪かったという事で」

降下しながら互いに軽口を叩くも警戒は怠らない、まだ完全に仕留めてはないし、横取り狙いの獣にも気をつけなければならない。

「じゃあ私がトドメを刺しますので、上で警戒をお願いします」

「任せろ」

先程のブレスを切り払ったのもあるが、手並みを拝見させてもらおう。

墜落とレールガンの命中によるダメージもあるが、それでもドラゴン自体はまだまだ元氣そうだ。

怒り狂って口から炎が漏れ出している。

そして悠々と着地したハレルを見て、ドラゴンは即座に球状の火炎ブレスを吐いた。

再びブロードソードの切り払いでそれを防ぐが、飛び散った炎が周囲を見境無く焼き払い、小動物達が逃げ去っていく。

ぱつとみた感じではあのドラゴンの炎は粘着性がある、いわばナパームやテルミットのように持続して燃やし続ける効果だ。

それは魔法少女のバリアコーティングを減衰・剥離させるのにも効果的に使えるだろ

う。

先程飛んできた球状のブレスもまたおそらくは内部に粘着性の可燃物が入っていたのだろう、それに魔法が合わさっている……と分析する。

となると、ドラゴン側の知能の高さを感じるが、同時にそのブレスを上手く防ぐハレルの技量もまた目を見張るものもある。

次に動いたのはハレル、地を蹴り、ステップで近づき、跳躍、ドラゴンの首を落とさんと斬りかかる、それに放射の形でブレスを吐くドラゴンであったが、空中でハレルが再び跳躍してそれを回避、そして急に消えた。

その姿は既にドラゴンの長く伸びた首にあった、ブロードソードが黒く変色し、黒い煙の様な何かを発してドラゴンの首に深く突き刺さっていた。

オレの目でも追いきれないほどの急加速で下降したその勢いでブロードソードを突き立てたのだろう。

そのままの勢いで首を地面に縫いとめられたドラゴンは動きを止めた。

ハレルの戦い方は、まさに「狩り」慣れている、人ではなく、獣を殺す為の動きだとオレは思った。

逆に言えば基本的な戦い方は通じるが、この動きはある程度以上の動きが出来る魔法少女相手にはあまり効果がない様にも見える。

なるほどオレを雇った理由がもう一つ見えてきた。

獲物を横取りされない為だ、こうした異界の様な場所ですら得られる貴重なモノや貴重な資源を狙って襲ってくる野盗のような奴は少なくない。

安心して得た獲物に無事に持ち帰る為には信頼できる力量のある護衛が居たほうが間違いない。

そうやって見ているうちにもブロードソードを背負い、ワイヤーでドラゴンの死体を縛ってハレルが上がってきた。

「無事、欲しいモノは手に入ったので戻りましょう。この通り手が塞がってしまったので守りは任せますね」

「わかった、任せろ」

ナユタ・ハレル、まずは少しこの事が見えてきた様な気がした。

chapter 1-05

トップクラスの魔法少女などは自分専用のガレージを持つ、確かにそれは魅力的だが警備上の問題や機材をそろえ、維持するのにも莫大な金が掛かるのでオレにはまだ手が届かない。

故に年契約のレンタルガレージだ。

ニヴルヘイムのアライアンス拠点でドラゴンを解体し、オレ達は必要な部位だけを借りガレージに持ち帰った。

「ここ数百年、人間の技術の発展は目覚ましいものがあります。飛行機を飛ばし、自分達を絶滅させられる程の兵器を作り、宇宙に人工衛星をばら撒き、人造の生命体を生み出し、ついには異世界にまで進出するにまで到りました。しかしまだまだ、未知は尽きません」

白衣を羽織り、白手袋とマスクをしたハレルが血液パックに詰められた竜の血を景気よく鍋へと入れ、そこにやけに匂いのキツイ薬をガラス棒で混ぜながら火にかける。

そこに細切れにされた竜の心臓をクーラーボックスから取り出し入れて煮詰める、それはもう酷い匂いだ、苦情が来ないか心配になる。

「大丈夫なのかそれは」

「ちゃんとした設備がないからねー……ちよつと原始的になるけど、魔術師とかの間だとポピュラーな方法でこのドラゴンの心臓を加工していきたいと思いますよ」

ドラゴンの加工が普通などと言える人間がこの世にどれだけ居るんだ、オレはそれが気になる。

しかし同時にある疑問が浮かぶ。

「……一つ気になるのだが、この世界のドラゴンとニヴル Heim や他の世界のドラゴン、どう違うんだ？」

「いい質問ですね、実は別物なんだよね。収斂（しゅうれん）進化といって、例えるならサメとシャチが似た形だったりするじゃないですか？環境に適応した進化の結果、似た形になるって奴なんですよね」

それは初耳だった、てつきりどこのドラゴンも大元は同じ種類からの派生だと思っていた。

「世界が違えば成り立ちも違う、例えば本当に神様によって作られたりした世界もあれば、宇宙の営みの中で偶然生まれた世界もある。更に言えば人間が作った世界もある。でも環境が似てると、それに適応した結果、外見が似てくるんですよ。」

「まるで見てきたような物言いだな」

「実際に異世界はいくつか見てきましたから。人間が居て、文明がある所も」

とても耳を疑わざるを得ないワードがまたしても飛び出した。

「待て、アライアンスもユニオンも異世界の他文明と接触した事など無いと……」

「隠してるんじゃないですかね？まあそもそもその次元渡航技術・世界移動もナユタで使っているモノは異世界から攻め込んで来た兵器から得ましたからね」

「それはオレに話して大丈夫な奴なのか？大丈夫か？契約満了と共に消されないか？」

「大丈夫ですよ、というより長い歴史の中で異世界からの侵略なんて何度もあつたし、それに対応した組織が集結した結果アライアンスやユニオンになってるのですから。上の方は知ってるでしょう」

深淵を覗き込むとき、深淵もまたこちらを覗き込んでいるという言葉思い出した。

つまりはオレ達が異世界に進出している時、異世界の住人もこちらに進出してきたという事か。

「なんだか急に話の規模が大きくなったな……」

「世界は広いし、そもそもこの世界の成り立ちだつてまだまだ分かってないのですから。知るべき未知はまだまだ山ほどありますよ」

これが学者の考え方という奴か、バカという評価を訂正せざるを得ないかもしれない。

「そうして元の成り立ちが違うものに互換性・共通性を持たせるものが魔術であり、科学なのですが私は巫女として神のパワーで強引に合体させてます」

「やっぱりお前はそういう奴なのか」

なんだか急にドツと疲れがわいてきた。

ようするに世界ごと何もかもが違うし、異世界人も居るが、こいつには違いなどそれほど関係ないという事だけがわかった。

まだまだナユタ・ハレルという人間の底は全然見えないが、スタンスが少しわかった。力だ、知識はあるが力で解決するタイプだ。

「そういう言っているうちに良い感じに煮えてきたので、そうですね……コアの形状はどのタイプがいいですか？やっぱりライアンシンボルですか？それともオーブ状？」

「オーブ状でいいが……いやまて、それがコアになるのか？」

まるで古きイメージどおりの魔女を現代に置き換えたように鍋をかき混ぜるハレルを見てオレは呆気にとられた。

「そうですね？」

「もつとこう……魔術のデータをプログラムするとかそういう過程は？」

「それはもつと後の工程ですね、これはコアの記憶媒体になる結晶体ですよ」

「びっくりしたぞ、てつきりもう出来上がったのかと思つてしまった」

「ははは、さすがの私でも鍋で魔法少女システムは作れませんよ、エイゲツのお兄さんならやりそうですけど」

「そんなに」

このハレルですら底が見えないのに、そのエイゲツという人物は一体どんな超人なのだ。

異世界の広さを思い知らされたかと思いきや、今度はこの世界の広さを思い知らされた。

「この後の工程としては、これを圧縮、冷やし固めて結晶にして、形を整えた後に入出力装置をくつつけてカバーをセットして、魔術式と人造神格を入れれば完成です」

「……そういえば人造神格という名と概要は知っているが、実際にそのものを見た事は無いな……」

「ああ、人造神格というのはまあ……概念の塊なので実体は基本的にないんですよ、一部を除いて。だから気軽にコピー……複製が効いたりもします。まあその結果がこの世界の有様ですが」

世界は本当にオレの知らない事ばかりだ。

「本当にお前の知識量には驚かされる、聞いたのはオレだが、処理できる情報の量を超えているし、想像も及ばない事だらけだ」

「まあ気軽に覚えていけばいいですよ、機械の構造なんて一々覚えて使ってる人は一握りなんですから」

言われて見ればそうだ、オレだって最初の頃なんて銃の整備すらできず、ただ安全装置の解除とリロード、そして引き金を引く事だけを頭に戦場に放り出された時期があった。

だが銃の構造や特性を理解した事で、敵が使ってくる際の対処法や自分が使う際に優位に扱う方法を覚えた。

そう考えると、自分の使う魔法少女モデルを自作するユニオンの魔術師の強さも納得できた。

あいつらは理解していたから強いのだと。

理解する事で、オレもまた強くなれるのだろうか。

今までよりもより強く。

chapter 1-06

『フアーヴニルモデル』

「強化変身」型魔法少女モデルで、人間から「魔法少女（ドラゴン）」へと変身する事からこの名が付けられた。

使用する為にはレイディアントが開発した「適合手術」を受け、肉体を改造する必要がある。

その為、魔法少女システム無しでも感覚や肉体の強化、高い負荷耐性を得る。

一方で「竜殺し」とされる魔術や武器に対してダメージを負いやすくなるというリスクもあるが、レールガンやプラズマキャノンが運用されるこの時代においては誤差の範囲内である。

「機種転換というのは大変ですよ、これまで慣れ親しんでいた動きの癖と新しいモデルの動きが乖離すればそれは混乱や隙となってしまう。なのでこの新しいコアはナインさんがこれまで使っていた「サイレントインパルス」に増設する形で取り付けようと思います」

「それは肉体にかかる負荷としてはどうなんだ？」

新しく作られたコアを手にオレ達はレンタルガレージ備え付けのトレーニングルームに居た、挙動のテストの為だ。

どんな装備も一度は必ず試しに動かしておかねば何が起きるかわからない、それが手作りのコアなら特にだ。

ハレルの事は既にある程度評価しているし、ニヴル Heim での動きから少しは信用しても問題ない人物であろう事はわかってきた。

だがまだ「信頼」していい人物であるかはわからないし、信じていても、それとこれはまた別だ。

「まあ長時間の戦闘を考えなければそんなに負担にはならないと思います、加えて武装配列次第でしょうか？それにどの程度調整が必要なのか、それを調べる為のテストですから」

こいつが何を考えているのか、何の為にこんなことをしているのか。

そんなことはまあいい、アライアンスの法にさえ触れず、互いに利益になるのならオレはこいつの要望通りには動いて見せよう。

オレは傭兵で、こいつは雇い主なのだから。

「なら、はじめろぞ」

サイレントインパルスのコアを待機状態から起動、加えて新しいコアを続けて起動す

る。

いつもよりも力は漲る、が。

「気分はどう？」

「まあまあだ、少し体が重い」

「了解、調整用プログラムと使い魔を起動」

『おはようございます、私はシルフィード14。魔法少女システム搭載の補助人工知能の使い魔です』

女性型の合成音声コアから発せられると同時に重さが少し軽減される。

『パワーアシストとバリアコーティングの出力比率を調整、肉体的負担を軽減しました。がどうですか？』

「わるくない」

「これまでは戦闘中の内部データ調整は余程の魔術師でもなければ出来ない荒業でしたが、それを使用者や状況に合わせて自動的に行ってくれる存在、それが使い魔です。どうですかナインさん？」

「ああ、確かに便利だ。このシステムもお前が作ったのか？」

「いえ、これは普通にナユタとか日本政府の一部とかで使われている奴ですね」

「コンプライアンスはどうなってるんだ」

「こいつはもう少し自分の勢力の技術を秘匿する努力をした方がいいな。」

「いいんですよ、どうせユニオンの魔術師の使い魔のデチューン品なんですから」

『アホを検知』

「いや、性能はいいようだ。しっかりとアホを検知している」

『お褒めいただきありがとうございます』

「私はアホじゃないです!」

「この使い魔のシルフィードとは仲良くやれそうだ、少なくとも目の前の魔法少女よりはしっかりとっている。」

「ともかく!まずは基本挙動をお願いします」

「わかった」

言われた様に、まずは跳躍・降下、前後左右へのステップに走行、フローティングによる浮遊と急上昇・急降下を一通り試す。

どれも出力の上昇で初速が上がっている上に距離が伸びてしまっている。

つまりいつも通りの感覚でコーナーを取ろうとステップをすればそのまま射線に飛び出してしまおうだろう。

『出力を修正、バリアコーティングとフローティングに割り振ります。もう一度挙動をお願いします』

シルフィードの指示に従い、もう一度同じ動きを繰り返す。

今度は初速は変わらないものの飛距離が短くなつた事で行き過ぎる事がなくなつた。とはいえ完全に慣れるにはしばらく時間が掛かりそうだ。

「どうですかナインさん？」

「しばらく動かしてみよう必要がある」

「わかりました、ならこの備え付けの模擬戦プログラムを使いましょう」

ハレルが部屋の端の移動して機材を操作する、トレーニングルームというだけあつてここにはホログラムとコンクリートブロックで出来た障害物による戦闘訓練プログラムが備え付けられている。

壁や床からせりあがる障害物、ビームセンチリーに機械歩兵にドローン達。

機械歩兵やセンチリーを停止させる為のビームピストルと電子ナイフなどが入ったウエポンボックスが各所に設置されている。

それを使い、敵を殲滅しろという事だが、どれも頑丈だが壊してしまえば弁償なので気をつける必要がある。

スピーカーから開始のブザーが鳴ると同時に標的が動き出して配置につく、企業製品とだけあつて思つたよりもこいつらの戦術はしっかりしており、狙いも正確だ。

撃ってくるのは少しの質量があるビーム弾だけ、生身でも少し痛いので済む程度の威力

しかないがバリアコーティングに接触すれば独特の被弾音が鳴る為にすぐわかる。

オレもこのトレーニング用の機械歩兵相手に最初の頃は20発30発と被弾したものだ、が。

まずドローンを目視で狙いを定めて4機沈黙させる、トレーニングピストルは弾数が12発、各所に落ちているマガジンか、倒した機械歩兵などから奪って弾を補充しなければならぬ。

フローティングで壁から迫り出した障害物の裏に張り付いて隠れながら、真下を通った三体一組の機械歩兵の頭を撃ち抜いて停止させるとそのまま急降下し、武器を奪う。

威力は変わらないが連射式のライフルだったのでそのまま障害物の迷路を感覚頼りに走り抜ける、ガシヤガシヤと機械歩兵特有の足音を聞き分け、進行方向を確認。

背後を取ってライフルで背中を撃ち抜いて三体のチームを停止させる、残りはセンチ2基と機械歩兵一組だ。

発砲音を聞いてこちらに向かってくるのを待ち伏せるのもいいが、センチリーの位置を探す必要もある。

コーナリングチェックをしようとした瞬間、ビーム弾が飛んできたのでそれを回避。おかしい、機械兵士なら感覚に引っかけられる筈なのに。

加えて恐ろしい程に正確な射撃、これはまさか。

「お前かハレル！」

「ご名答ですね！」

あいつ！戦闘プログラムを対人モードにしていたのか！

しかもハンドデの味方ミニオン有りと来た！

魔力までは見ていなかったオレのミスだ、改めて魔力感知まで加えると確かにハレルはそこにいた。

逆言うとそれ以外では見つからない様にステルス化していたのだ。

つくづく食えない奴だ。

そうなっても勝利条件は変わらない、戦力を全て無力化するだけ。

対人モードなら部屋のセンサーが被弾を確認して勝敗を識別するブザーを鳴らす。

先に三点取った方の勝ちだ。

「ああちなみに、私はプレイヤー2なのでよろしくおねがいしますね！」

風を切る音と共にカンと何かが壁にぶつかる音がした。

グレネードだ、即座に上昇して被弾範囲を回避、投げてきた方向に向けて同じくグレネードを投げ込むが、ビームで撃ち落されて起動しない。

続けて飛んできたビームを回避しつつ再び遮蔽物に隠れる。

本当によくやる、侮れない相手だ。

『いい動きです、ナイン』

「そいつはどういたしまして」

中々のプレッシャーだ、実際に戦場ほどではないが臨場感がある。

感覚を研ぎ澄まし、勝ちに行く為の手段を考える。

だが勝つのはオレだ。

chapter 1-07

時間切れのブザーが鳴る、結局ハレルからスコアを奪われる事はなかったが、こちらも当てる事が出来なかった。

障害物が引っ込み、再起動した機械歩兵達が使用した武器を回収しながら自動で片付けを始める、手元に残っていた武器を返却するとハレルがこちらに歩いてくる。

「どうでしたかナインさん？ 普段通り動きました？」

「ああ、お前から一本も奪われない程度にはな」

「期待以上です。シルフィード、最適化は？」

『進めています』

「では、お仕事の話に入りましょうか」

「こいつにとつて竜狩り、模擬戦、そして新型コアの試験は……オレの実力を測る為のものだった。」

「つまりどこまでの仕事を任せられるかというのを自分の目で判断したかったのだらう。」

異世界への資源開拓、新型モデルの作成……それらしい事は言っていたもののこいつ

は仕事の内容をぼかしていた。

それはオレにその仕事を果たせるか、任せられるか、まだ決心がつかなかったのだから。

傭兵とは基本的に使い捨ての消耗品だ、多少の金で数を雇って、重要度の低い仕事に回される。

「正直に言うとなを雇うのって初めてで、特に魔法少女の傭兵さんとかってどの程度の仕事が出るのかって、私は知らなかったのです。なので少し見極めるのに時間をかけてしまいました、私としては行けると思ったので改めてお願いしようと思います」

これまでの緩い雰囲気ではなく、大人びて引き締まった表情でハレルは告げる。

「この世界の為に、一緒に異世界へ冒険の旅に出てくれませんか？」

それは間違いなく危険な仕事だろう、想定外の出来事など当然、どんな敵が現れるかわからない。

純粋な戦闘力だけでなく知識、判断力、適応力、対応力……様々なモノが求められる。本来なら傭兵に回ってくる様な仕事ではなく、政府内や企業連合内での調査隊が組まれる様なものだ。

せいぜい回ってくるとして、現地拠点の防衛の仕事ぐらいだ。

「何故オレ達アライアンスの魔法少女を選んだ？」

「私が外の世界の人達を知りたかったからです。ナユタは本来、かなり閉塞的で他の組織との仲もそれほどよくは無いのです、偶然にも師匠……アマネお姉様やエイゲツのお兄さんなどが個人的にハヤテさんと付き合いがあったのでアライアンスを選びました……何よりもあなた達は「誠実」だと聞いていましたので」

誰しもがそうとは限らないが、確かにアライアンスは自由と誠実さに重きを置いている。

例え相手が敵対するユニオンであろうと取引次第では必ず相応の対応をするし、身内であつてもナメた事をすれば徹底的に叩き潰す。

「わかった。詳しい概要を聞かせてくれ」

「行き先は「第14世界」他の異世界同様にほぼ未開の地ですが「文明の痕跡」はあります。私と共にここを探索、遺物の調査、あるいは現地に文明があつた場合「交流」「戦闘」になることもありえます。報酬はアライアンスを経由して「ナユタ」から払われます。期間は最低でも半年は見積もつてますが場合によっては延長も考えます」

最低でも半年、ならばそれ以上掛かると見積もつたほうがいいだろう。

それにしても未知の文明のある世界の調査とは初めてだ。

少しばかり興味がそえられるというもの。

「参加者は私とナインさんだけ、物資運搬ドローンはありますし、現地の拠点は既に一応

用意されています。無人ですけどね」

危険な旅になるだろう、死ぬ事もありうるかもしれない……が今更だ。

どうせ傭兵である以上、どんな仕事でも常に死と隣り合わせだ。

「最後に一つだけ」

「何でしょう」

「その仕事は楽しそうか？」

「はい、私は楽しみにしてますよ」

ハレルの満面の笑み、それはアホ面でもマヌケ面でも取り繕った営業スマイルでもない。

ただただ純粋に心底未知を楽しみにした者の顔だった。

「いいだろう、引き受けよう」

「では……改めまして、私はナユタ・ハレル。日本政府とナユタに所属する「アーティファクト研究者」であり、ナユタの巫女であり、魔法少女です。よろしくおねがいしますね、ナインさん」

差し出されたその手を取る、それは契約の証だ。

オレは依頼された仕事に対して、初めて楽しみだと思った。

「ああ、よろしくな。仕事である以上、期待されてる分は働くさ」

トレーニングルームを後にし、オレ達は準備を開始する。

必要な装備の調達だ、とはいえ店を回ることなどなく、端末で発注し届く、拠点として
いるガレージで届くの待っただけだ。

「第14世界は地球と似た環境ですが、他の異世界の殆どと同じ様に地図がまだ出来て
いません。ちなみに空には「天井」があつて打ち上げた衛星が激突してるのでどうい
う世界形状をしているのかもよくわかってないですね」

「天井があるのか」

「はい、もしかしたらかつて神々が作った世界、だったりするかもしれませんがね」

「なら無礼がないようにしておかないとな」

念を入れ、武器は用意できるだけ買い込んでおく。

あまり乗り気ではないが近接用の武装も加える。

連射性が高く、装弾数も多いプラズマライフルに電磁ブレード、電磁ランス。

変り種ではボウガンもだ。

衣装も予備弾倉も多めにストックできるジャケットタイプを選ぶ。

「ところで、この新しいコアの名前はあるのか？」

「カーバンクル、かつて富と榮譽を求めた探険家達が探した幻の獣の名前です」

「皮肉か？」

「験担ぎです」

古き時代においても、人は新天地に富を求めて旅をして来た。

その多くは道半ばに倒れ、辿り着いたとしてもその先で衝突を引き起こしてきた。

オレ達の旅にも多くの障害が立ちはだかるだろう。

その先で見つかるものが大した物でないかもしれない。

だが夢を見ざるを得ない。

未知の素材や宝石、あるいはその世界においての伝説の武器、この世界の人間がまだ知らない何か。

持ち帰ってこれれば、間違いなく名誉となる。

何者でもないオレが名を残す事だつてできるかもしれない。

「お前はそこに何があるとと思う？」

「私は……そこにあるのは結果だと思えますよ」

「結果か」

「旅をした結果という奴です」

よくはわからないが、なんとなくわかる気がする。

「どの道にしても、調査した結果は出ますからね。それを提出すればかなりの報酬にな

ります」

「そうなのか」

「もちろん何かしらのお品やサンプルを持ち帰れば買い取ってもらえますし、何よりも新しい魔術のアイディアなんかになればそれだけでも元は取れると思っているので、気楽に、ポジティブにいきましょう」

ハレルは、見慣れてきた笑みを浮かべていた。

キヤラ設定／用語／CHAPTER | 1

No. ^{ナイン}
9

魔法少女

所属：アライアンス（レイディアント・サービス）

職業：傭兵

年齢：不詳

経歴：被検体だったがアライアンスに保護され、後にライセンスを得て魔法少女となる。記憶喪失。

一人称：オレ

アライアンスの中では割りと標準的な魔法少女傭兵、あまり執着などはなく、実力も平均的で、そこそこの信用と実績がある。

強化適合手術を受けているので感覚はそれなりに鋭く、特に音と空間の歪みに反応しやすい。

・フアーヴニルモデル・サイレントインパルス

ナインの使用する第一世代魔法少女モデル、ソニックインパルスの制式タイプで高水準の出力・機動力・防御力が揃っている。

メインの武装はレールガン

魔法は標準的なモノしか搭載していない。

衣装はジャケットタイプ、フードの両サイドについている耳のようなものは補助感覚器官になる。

・カーバンクル

ハレルが制作したサイレントインパルスのサブコア、出力を上昇させる効果と魔力タスクとしての役割を持つ。

また人工知能「シルフィード」による補助もある。

ナユタ・ハレル

魔法少女／巫女

所属：日本政府およびナユタ

職業：研究員／巫女

年齢：14

経歴：ナユタを構成する一員として生まれ、巫女として修行を受けた後にアーティファクト研究の道に進む。

一人称：私

日本から来た魔法少女、時々緩い顔をしているが油断できない人物。

ナユタの巫女特有の魔術的な能力で「作る」事が得意。

ナインに異世界探索の同行を依頼した。

・エンジェルモデル・アズール

ハレルが自作した魔法少女モデル、拡張性の塊で、様々な武装に対応している。

魔術も様々なものが搭載されているがその能力の多くはまだ不明。

その場にある資材で武装を作り出す事も可能である。

響希ハヤテ

魔法少女

所属：アライアンス（独立傭兵）

年齢：17

経歴：魔法少女システム普及以前から強化兵士の被検体だった、アライアンス最初の魔法少女となり多くの成果を上げた結果最強の座に上り詰める

一人称：私

アライアンス最強の魔法少女傭兵、ユニオンの魔術師や魔法少女を多く倒している。ハレルの師であるアマネとの個人的関係からナインを紹介。

ナユタ・アマネ

魔法少女／巫女

所属：ナユタ

職業：巫女

年齢：16

経歴：【検閲済】

ナユタの巫女の中でも最強であり「イレギュラー」とされる者、多くの情報は伏せられているハレルにとっての「師」である。

ハレルにとっては恐怖の象徴であり、尊敬はしてるが出来るだけもう顔は合わせたくないらしい。

ナユタ・エイゲツ

神官（男）

所属：ナユタ

職業：神官

年齢：16

経歴：【検閲済】

アマネの双子の兄、ナユタの中では最良の神官と呼ばれている。魔法少女システムの基礎を作り出し、他にも多くものを開発しているが、それを悪用され少しばかり精神的負担で療養中。

用語

・魔法少女

「魔法少女規格 MAGIC GIRL STANDARD SYSTEM」

人造神格の巫女の力を再現し、より簡単に高出力の魔術を使う為の魔術デバイスとして研究されていた。

しかし技術流出や戦闘兵器化など本来の目的とは別の運用がされている。

・人造神格

ナユタをはじめとした組織が「巫女」あるいは「神官」を用いて運用している文字通り「人造の神」、魔法や魔術に必要な魔力などといったエネルギーソースや特殊な能力を引き出す事が出来る。

また実体を持っておらず、簡単に複製・量産する事が可能だが、実体を持つ人造神格も存在する。

・アライアンス

アライアンス、「同盟」を意味する言葉は現在では単一の組織を指す言葉となっていた。

工業技術・生体技術・軍事技術、そして最新の「魔導工学」を初めとした「特異技術」まで幅広くカバーする、世界最大の複合企業連合。

資本主義の果ての実力・成果主義と過激な権力争いは時に企業同士の抗争―内戦に発展する程であるが、自分達で決めたルールは徹底し、「誠実さ」を何よりも重視する。

故に裏切りや不義……つまりは「嘗めた真似」をすれば、それは徹底した攻撃の対象となる。

・ユニオン

EU圏の企業・政治結社・魔術結社などが主体となった「統一連合」であり、混沌に満ちた世界に統一による平和を齎すことを掲げている。

環境汚染や資源枯渇、絶え間ない紛争による危機から人種や国境・宗教の垣根を越えて人類という種を守る為に設立された。

優れた者による優れた統治を掲げ、その為なら武力の行使も厭わない、それによつていくつかの問題は解決したが内部では派閥争い・権力闘争が変わらず繰り返り広げられている。

しかし巨大企業連合「アライアンス」という強大な敵を前に団結して対抗する程度には結束力はある。

・ 国家

弱体化したが、まだある程度の力は残している場所もある。

Campaign Mode Chapter 2
chapter 2-01

見渡せば青い空と青い海、映像の中でしか見た事のない美しい景色がそこにはあった。

最も、この青い空は破壊不能な天井で、海の色が反射して青く映っているだけらしいが。

海の上に浮かぶ孤島に世界を結ぶ仮設基地はあった。

日本政府の識別名「第14世界」、ほぼ地球と変わらない大気組成で物理法則もそう違いはない、問題なのは高度20キロで天井にぶち当たる事と見渡す限り海で陸地が見当たらない事、それと電波と魔力が乱れやすい事。

ハレル曰く、他の世界の調査が優先され、無人拠点だけが展開されて放置されているらしい。

こうした拠点が無人化しているのは単に人手不足だからではない、生身の人間が異世界で活動するのは危険だからだ。

魔法少女は内部の人造神格のおかげで「基底法則」を保っていられる、つまりは物理

法則が違ってもいつも通りの挙動が出来る。

むしろこれが必要ならば余程に技量のある魔術師か、マシン以外が世界を移動するのはリスクが高すぎる。

そもそも未知のウイルスや寄生虫といった危険性もある、オレとしてはどんなに法則や環境が良くても、それが恐ろしくて異世界でシステムの解除はできないし、異世界の食べ物を口に入れるのは拒否感しかない。

ポータルから搬入されてくる資材をドローンが仕分け終わるのを待ちながら、オレ達は砂浜でくつろいでいた。

「聞いていたより随分綺麗な場所ですね」

「ああ、もっと調査が進んで問題なければ別荘でも建てたいぐらいだ」

「魔法少女でないとは出来ないと驚沢ですね、それは」

実際に異世界への移民計画はユニオンもアライアンスも考えている、とはいえいくら環境がよくとも世界の法則の違いが大きなストレスとなる。

これは宇宙への進出も同じだ、小規模コロニーや宇宙ステーションならば既に月との間にいくつか浮かんでいるが、やはりまだ地球無しでの自活には程遠い。

おまけに火星のテラフォーミングはまだ時間がかかりそうだ。

そうなる地球とそこから行ける異世界から得られる資源でまだしばらくよろしく

やっていかなければならない。

それが人類が生き延びる為の最善の手段だと、多くの者は気付いている。

「荷物が揃ったらコンテナドローンを背負ってブースターユニットで陸地を探す、見つからなかったら水中探索に切り替え、だったな？」

「はい、海底に朽ちた木製の船の残骸がありましたので恐らく陸はあるとは思いますが……沈んでいる可能性もあるので」

この世界には文明が存在した、あるいは今も存在している可能性があるという。

船の構造からおそらくは人かそれに類する生物の文明である事、特殊な技術は使われていない古式な船である事がわかっていられるらしい。

オレの頭に思い浮かぶのは古き海賊のイメージだが、果たしてどんな者達が乗っていたのだろうか。

「そういえば日本政府やナユタが接触している他の文明ってどんなのだ？」

「私達の世界より少し手前ぐらいの技術を持った科学文明とか、終末戦争の生き残りの文明とか、宇宙からやってくる未知の敵と戦っている世界とかですね。特に滅びかけの二つの世界は今後、私達の世界がそういった危機に晒された時の対応の為に参考しつつも支援している感じですね」

「どこも大変そうだな、具体的にどんな支援を？」

「魔法少女システムを提供したり、武装開発を手伝ったりです。向こうの人とはやり作りが違う為に色々作り直す必要があったらしいですが、そのおかげで絶滅の危機は逃れたらしいですよ」

それは滅びかけている者達にとってはまさに救いの手だったかもしれないが、侵略側などから見てみればとんだ災難だ。

とはいえ、善意だけで助けている訳でもない、まさに取引か。

「いいんじゃないか、それでもしこの世界でも助けを求め誰かが居たらどうする？」
「私は余裕があったら助けようと思います、でもそれを強制はしませんし、私もダメそうなら見捨てます」

「薄情だな」

「滅びかけの世界なのは私達の所も同じですからね？ 余裕はあまりありませんよ。限られたリソースの中で心が痛まない程度で、自分に言い訳が出来る程度に私は動きます」
「わかった、そうしたいならオレはお前の判断を否定しないようにするよ」

「ありがとうございます」

それは善でも偽善でもない、あくまで自分を納得させる為の行為だ。

余裕がある内に見捨てるのはハレルにとって、納得しにくい行為なのだろう。

そうしている内にドローンが荷物の整理を終えた報告をしてくる。

「さて、荷物は揃った様だが……第一陣で持っていく武装はどうする？」

「私はブロードソードとアサルトライフル、サブにピストルとグレネードを持っていくと思います」

「ならオレはレールガンとサブマシンガン、ブレードで行かせて貰う」

魔法少女用の増設ブースターと武装コンテナを兼用するユニット「スレイブニール」に荷物を詰め込んでいく、他の爆薬や食事・薬品などはコンテナドローンとジャケットの内側に詰め込む。

戦闘前の高揚感とはまた違う、これが「冒険者」の気分というものなのだろう。

コアに搭載されたレコーダーはしっかりと機能している、感覚も通ってる。

問題なし。

「では、第一回調査に行きましょう。ナインさん」

「ああ、行こう」

スレイブニールユニットを腰部に固定、フライトユニットに足を乗せ、両サイドから出たグリップユニットを掴む。

『制御はシルフィードにお任せください』

「頼んだ」

スレイブニールユニット本体にも自動制御装置はあり、なんなら拠点まで自力で帰還

する程度のプログラムはあるがシルフィードが居れば安心感が違う、さすがは日本政府の制式採用型の補助AIだ。

『ブースト、起動』

フロートイングにより浮かせたスレイプニールを加速させ、オレ達は拠点を発つ。

青く煌く海と鮮やかな空の狭間、全面に展開した弱いシールドで風を受け流しながら直進していく。

一方でハレルの方を見れば手動で操縦していた、よく考えればハレルの方にはシルフィードの様なAIは搭載されていなかったのだろう。

せいぜい事故を起こさないで貰える様に祈りながら、オレ達の旅は始まった。

chapter 2—02

水没した石造りの街の上に木々が生い茂る、放棄されてからかなりの時間が経っているようだ。

最初に見つけた文明の痕跡は水没した遺跡という形だった。

「さすがに住人は居なさそうだな」

「海面上昇か地盤沈下ですかね」

オレ達の世界にも海面の上昇で滅んだ街はいくつかあったと聞く、とはいえ島全体が水没して消えたというのはそうそう聞かない。

「どういう街だったかわかりそうか？」

「恐らく交易路の途中の島かなんかだったんでしようね、ここで休むみたいな」

「なるほど、ただこの有様だと……おそろくめぼしいものもなさそうだな」

「そうですね、沈む島なら恐らく多くの物は持ち出されているでしょう」

少なくともこれも収穫だ、街の規模はそこそこに大きい、全盛期にはどの程度まで繁栄したのだろうか？

「さあ、次に行きましよう」

「そうだな」

ハレルに続き、再び西方向へ飛ぶ。

スレイプニールの巡航形態で二時間、となると案内次は早く見つかるかもしれない。「地平線・水平線がある」という事は少なくともこの世界は「球状」の惑星型、それでいて天井があるのは……なんでしょうかね」

上を見上げれば太陽の様なものはある、しかしおそらくそれは「天井」に映った照明のようだ。

「どちらにしても作られた環境である、というのは間違いないだろうな。所謂階層世界とかか?」

「なるほど、もしくは天井ではなく外壁かもしれないね。どちらにしてもこの向こうにもまた別の世界があるのでしょか? 気になりますね、ぶち抜いてみたくなります」

「それはやめとこう、なんかよくない気がする」

自分達の世界とはまるで形の違う世界を知る、それがこうも楽しいものだとは思わなかった。

なるほど、ハレルが楽しみにしていたのも今ならよくわかる。

「それはそうと見えない天井はありますけど、見えない壁が無くてよかったですね。今

の所は」

「確かに言われて見ればそうだ、天井を支える柱の様なものも見えないな」

「一体この世界の構造はどうなっているのだろうか？地球の常識で考えれば星を覆う外壁を作るとして、地球自身の重力・引力を考慮すると柱で支える必要がある様な気がする。」

専門的な知識がない為、さすがによくわからない。

少なくとも現状、下方向に重力があるのは間違いはない。

「神話的に見ても天と地を支えるなにかしらつてありますからね、とにかく見えない何かとかにぶつからない様にはしているんですけど、念を入れてくださいね」

「今更か」

「ええ、今気付いたので」

「とはいえスレイプニールにはソナーやレーダーもついている、そうそう見えない何かに激突という事はないだろう。」

魔力もハレル以外には感じないし、空間の歪みの様も認識できない。

警戒、という程ではないが周囲への意識は絶やしていない。

見通しのよささというの、それだけ射程距離が長くなり、回避しにくいという事にも

繋がるのだから。

水没遺跡から特に何事もなく、道中にクジラの群を見かけたぐらいだった。

そして三時間、航行距離だけが伸びていく中、水平線に新たに影が見えてきた。

それは陸だった。

ハレルと顔を見合わせる、ようやく陸地が見つかったことに喜びが隠せていなかった。

出発から五時間、オレ達は最初の陸地へと辿り着いた。

生憎、そこは港でもなんでもなく砂浜に森、少し先は山があつて見通せない。

だが少なくとも先程の水没都市から文明はあつた事が確認できている。

となると一つ問題がある。

「どうする？ スレイプニールはここに置いていくか？」

「いえステルスモードで行きましょう、山の向こうがまた海かもしれないし」

「わかった」

この世界にまだ文明があつたとして「今」の文明レベルがわからない、となるとこの飛行機械を飛ばしていれば原住民を驚かしてしまうかもしれない。

所謂現地への配慮という奴だ。

光学迷彩で視認性を下げた上でスピードを上げ、鳥の群を追い越して、陸の上を飛ぶ。森を越えると草原に途中舗装されてない道の様なものを見つける、草に埋もれてない事から比較的新しいようだ。

「ハレル、どつちにいく?」

「北にしましょう」

ハレルが指した方向に向かって移動すると途中に木の小屋やレンガの建造物など、ついには馬車もあつて、そこには生きている「人間」が居た。

かつてオレ達の世界もこんな風に自然の中で暮らしていた時代があり、失われたソレが目の前で動いている。

「すごいな」

「そうですね、とにかくこれでハッキリしました。この世界には人が居て、文明があります、そして」

これだけで恐らく調査の目的の一つは果たせただろう、だがまだまだ気になる事は多い。

この世界の人々がどういう認識でこの世界で生きているのか、それを知る必要がある。

「一体どんな歴史を歩み、どんな暮らしをしているか、だな」

「そうです、出来るだけ介入し過ぎない程度に、目立たぬようにしながらそれを探らせて貰いましょう」

オレ達はあくまで旅人だ、それもこの世界の住人ですらない。

正直に言つて向こうから積極的に仕掛けてくる場合は迎え撃つなりするが、侵略者になりたくないとは思わない。

それはハレルも同じだろうが……ふと思ひ浮かぶのがユニオンやライアンスの他の魔法少女や権力者達ならどう思うのだろう。

どういふスタンスで異文明と関わっていくのか、少しばかり気になる。

一部の者はやはり、支配と略取を目論むのだろうか？もし既に関わっているならどうしているのだろう。

ナユタは将来的に自分達の危機対策の練習として技術的支援をしているとは言つていたが、気になる所だ。

オレとしては、ライアンスには異世界の文明に対しても誠実な対応をしていて欲しいと願うほかない。

「あれは……街ですね、見えました」

「ハレルは随分と目がいいな」

「それほどでも」

その街は川と城砦に囲まれるようであった、石レンガと木の建造物に、城、広場、街の中を流れる小川……おそらく用水路か？まるで御伽噺の中の景色のようだ。

そして街灯の様に見えるのは結晶だ、オレ達が使っているのとは別の魔力か？エレメントに近い力を感じる。

おそらく魔法技術のある文明だ。

「すごいな、ハレル」

「ええ、でもまずはスレイプニルを近くの森に隠しておきましょうか、それと街への入り方も考える必要がありますね」

先ほどとはまた違った真剣な眼差しでハレルは街の一点を見つめていた。

それは街の中でも城ほどではないが一際大きな建造物、どういったものかはわからないし、オレには何も感じ取れないが、ハレルには何か感じるのだろうか。

「どうかしたか？」

「いえ、多分大丈夫でしょう。悪意、ではないでしょうし、向こうも何かを警戒しているだけなのですから」

よくはわからないが、どうか荒事にはならない様にとオレは願った。

chapter 2—03

この世界最後の「女神」が茶の入ったカップを覗き込み、疲れた笑みを浮かべていた。

『命のある場所には争いがある』誰かが言った言葉を思い出した。

「あなたはそれから2000年、一人でこの世界を守っているのですか」

「いいえ、守ってるなんて大層なものじゃない、ただ壊してしまわない様に眺めている……それだけよ。例えば私が居なくなってもこの方舟の循環は止まらない」

アーク、それがオレ達がやってきた世界の名。

神々が引き起こした大破壊から生命を守るために心優しき女神が作り出した、守護領域。

スレイプニールを森に置いて街へ入る手段を模索しているオレ達の前に現れたのはこの街に暮らす「アレア」という隻眼の女魔術師だった。

聞き耳を立てればこの世界の言語とオレ達の使う言語は別であったというのに、アレアはハレルとどういふ訳か「話して」、門番に対して遠くから来た知り合いだと説明して

通れる様にしてくれた。

「どうやらハレルが感じ取ったのはこのアレアの気配だったそうだ。

それから彼女について歩く中で街を見た、自然のエレメントとの調和を果たした美しい街、それがオレから見たこの街の印象だった。

人々は活気に溢れ、様々な外見の人間が居て、中には獣人や人形の様な者も居た。

そして案内された先で辿り着いたのは一際小さく粗末な家、それが彼女の家だとう。

簡素なベッドに棚、そしてテーブルと三つの椅子にまるで予想していたかの様に用意されていた3つのティーカップとティーポット。

注がれた茶にハレルは何の躊躇いもなく手をつけ、オレにも飲む様に視線を向けた。

かなり気乗りはしなかったが、仕方なく口をつけてみれば不思議な香りが口の中に広がり、不思議な心地良さを感じた。

「これはこの世界の言の葉から入れた茶よ、つまりはあなた達にこの世界の言葉を理解させる為の祝福」

そしてアレアはその真の姿を現した。

銀色の髪と白い肌、そして美しいその青い目は片方が潰れていた。

「お招きいただきありがとうございます、女神アレアスティア」

「ええ、ようこそ。巫女ハレルよ、この世界最後の神として歓迎するわ」

オレは本物の神という存在と初めて出会って、言葉を失った。

隻眼の魔術師アレアと名乗った、傷つき、明らかに弱っているという印象を受けた女性から感じる気配は間違いなく、オレよりも力強く美しいものに変わっていた。

「あー、こつちの言葉を失ってるのは付き人のナインです。一緒に旅をしています、もつともこれが二人での初めての旅ですが」

「そう、旅はいいわよ。私も時々この世界を旅して人々の営みを見て回っているけれど、成長や進歩……それに命が紡ぐものを感じられてうれしくなるわ」

そもそもこの本物の女神とそれなりに親しげに話しかけるハレルは一体どういう肝の据わり方をしているのだ、オレは自分の小ささにあまりに思い知らされて落ち着かなといったものに。

「そう、でも貴女は随分と旅慣れてるわね……この世界にはどういいう目的で来たのかしらっ。」

「調査です、私達の生まれた世界はまあ少しばかり争いのせいで危ういので、それを救う為の手段を探して旅をしているのです」

ハレルは目的を隠す事無く言つてのけるが、オレにはそんな勇氣は無い。

仮にも別世界の神に対して「この世界の資源を貰いに来た」などととてもではないが

言えない。

「どこの世界も変わらないわね、でも滅びてないだけ十分よ。この私達の文明と違ってね」

「それは……」

世界最後の神、それは文字通りだった。

「ここは元は神々の世界だった、けれど愚かにも神々は争いによつて滅びたわ。私を残してね」

アレアスティアが語ったのはこの世界の簡単な歴史。

大地から生まれた神々が眷族として動植物を生み出し、覇を争い、やがて滅びいくまで。

神代は終わり、今あるのは成長しつつある人の世界。

「ここは私が作り出した方舟、愚かな神々が生み出した罪無き者達を生き延びさせる為の揺り籠よ」

そうしてアレアスティアがティーカップの中に映したのはこのゆりかごの外の光景。

このドーム状の生存領域の外は主を失い徘徊する神々の遺物や邪悪な怪物が跋扈する死の大地が広がっていた。

かつてはこの世界も空のある命溢れた惑星だった、だがこの過去の遺物から人々を守

るには偽りの空を作らざるを得なかった。

「循環によつてこの方舟の中で命は生き延びられるでしょう、しかし外を目指す事は出来ない。そう遠くないいつか、この世界は破綻を迎えるわ」

作り上げた神だからこそ、わかるモノなのだろう。

この方舟にも限界があるのだろう、まるでオレ達の世界と同じだ。

女神の悲しげな顔に少しばかり心が痛み、ハレルの方を向く、しばらくオレと同じ様に聞きに徹していたが……。

「ところで、外にある遺物は持つていっていいですか？」

信じられない事を言い出した。

オレは耳を疑った。

ハレルはいつものアホ面で笑っていた。

女神様も呆気にと取られている。

「危ないわよ？それこそ神々の創った怪物もいるわよ？」

「その怪物つてどれぐらい強いですかね？あんまりアレだったら数を減らしておくのもやっておきますよ？」

それはまるで掃除業者の営業だ、いらぬものを片付けるお仕事とでもいわんばかりで、オレは頭が痛くなってきた。

「ねえ、この子正気？」

「オレにもわからないです……」

仮にも世界を、神々を滅ぼした物品や怪物だぞ、それをオレ達の世界に持ち帰ってどうする気だ。

まさか一度世界を滅ぼしてリセットする気かこいつ？

「あ、そのまま持つて帰るって訳じゃありませんよ!? この方舟を通る以上そんな危ないものを完全なままに運べませんからね! バラバラに解体したり解析したりして分けて運びますから」

「本当に持ち帰る気なのかハレル」

「何を言っているんですかナインさん、その為に来たんですよ?」

確かにオレが受けたのは文明の遺物なんかの調査や持ち帰りの仕事だ、だがそれはせいぜい魔法道具ぐらいだと思っていた。

そんな神々の遺物などとは想定してない。

「とんでもない者を迎え入れてしまった気がするわ」

「そうですね、オレもとんでもない奴に雇われてしまった気がします」

思わず女神と顔を合わせる、本当になんなんだこの魔法少女。

chapter 2—04

それは死の星、というに相応しい光景だった。

荒れ果てた神々しき都市の残骸には灰色の雪が降り積もる。

旗は朽ち果て、砕けた鎧は積みあがり、守るべきものを失った盾は半ば埋もれ。

墓標の様に大地に突き刺さった槍は呪いを放ち、その周囲には亡者と化した何か徘徊する。

これが神々の世界の成れの果て。

オレ達の世界のありえるかもしれない末路。

一方でハレルは目を輝かせていた。

「すごいですね！神器と呪いの大安売りです！」

「こいつにはどうやらこれが宝の山に見えているらしい。」

「もつとここの他に感じ入るものはないのか」

「ありませんね」

はつきり言い切るハレルの顔には迷いが無い。

つくづく思っていたがやはりこいつは危ない奴なんじゃないだろうか？確かに神様

と話が出る程の能力はある様だが、本当についていって大丈夫な奴だろうか？

もしかしてハヤテ氏はコレを知っていてオレを身代わりにしたのではという疑念が浮かんできた。

さつそくその辺りに埋もれている瓦礫を掘り出しては比較的無事なモノを見つけて積み上げるハレルの姿はとても楽しそうだが、その一つ一つからおぞましきや神々しきを感じるギャップが酷い。

「それで、お前は何を基準に回収していくんだ？全部は回収しきれないだろう？」

「そうですね、まずは汚染を防げるものを探してます。それを加工して防護システムを構築します、じゃないと魔法少女システムの対汚染防御でも危うい可能性が高いですからね」

そうしてハレルが掘り出してこちらに向けたのは白と金の丸盾……だが酷く破損している上に汚れがついていてその本来の力は大きく失われている様に感じる。

だがこいつなら加工して再利用可能にするのだろうか……。

アレアスティアの権限でオレ達用の「外への扉」を設置して貰い、そこへ世界を繋ぐポータルを設置された無人拠点の区画をそのまま移動してもらった。

方舟というだけあって、ブロック構造となっており、操作によってある程度は自由が

利くとは言っていたが、簡単に島一つの配置が変わるといふのはそれはまたすごい技術であった。

神という存在の格の高さを再認識すると共に、そんな神々でも争い、破滅するという事に無常にして無情を感じていた。

「それにただ貰って行くのもアレなんでちゃんとアレアスティアさんの世界で役に立ちそうなものが最優先ですね」

「その辺りの良識はあるんだな……」

「あなたは私をなんだと思ってるのですか」

「サイコ女」

「それほどでもない」

確かにこれだけモノが無造作に転がっていれば、中にはきつとあの神様がまだ使いたいものもあるかもしれない。

とはいえ、オレにわかるのは武器かそうでないかと、呪われてるかどうかぐらいだ。

都市の残骸の周りを徘徊する亡者を見れば、あれはとりあえず呪われているなどはわかるし、無造作に転がっている黒くての禍々しく捻じ曲がった槍も恐らく邪悪な部類だろう。

「オレは触らないほうがいいか」

「そうですね、周囲の警戒だけお願いします」

しかし、何故こいつはこんなに怖いもの知らずなのだろうか。

戦いの中で生き残る為に「怖れる」事を知り続けてきたオレにとってはわからない。

ただ単に考え無しという訳ではないだろう、幾ら強くともそれはそれで死に一直線だ。

ゆらゆらと虫の様に寄ってきた亡者の一体を見る、腐敗を通り越して、朽ち果て、何故動いているのかすらもわからないミイラだ。

元の姿すらも思い浮かばないそれをブレードで横薙ぎに両断して介錯してやる。

かつては戦士だったのか、鎧を纏い、折れた剣を持つているそれも、もはやそれは脅威ですらない。

劣化によって簡単に碎けてしまった。

こうなっても過去の栄光に縋るのか、それとも彼らの中では戦いは終わっていないのか。

それすらもわからない程に薄れ果てているのか。

その有様にオレは自分に改めて戦う意味を問う。

生きる為だけならば他にも道はあった、ただの労働者であろうともアライアンスの勢

力下でなら生きるには困らない。

自由と強さへの憧れ、それがあつたはずだ。

目の前の囚われた鎧の亡者に刃を突き立て、電流を流して焼く。

まだ燃え上がる何かが残っていたのだらうか、炎の塊となつて朽ち果てる。

この繁栄した世界を滅ぼした神々の争いの切欠は誰が最も最上位の神に相応しいかという議論からだつたと、かの神は言つた。

神は我が強い為、それはもう醜い有様だつたそうだ。

議論は殴り合いへ、そして武器を持ち出して殺し合いへ。

些細な切欠が破滅への道へとなつた。

実際に滅びた世界を見てみれば、オレも考えてしまふ。

この荒れ果てた大地に眠る愚かな神々とオレ達の世界の人類は何が違うのかと。

「ハレル、お前は何の為に戦っている?」

「なんですか急に」

「いいから答えろ」

「ははーん、もしかしてこの世界の惨状を見て自分の戦う意義を見失いかけていますね」

ハレルは笑いながらそう答え、ム力つくアホ面でこちらを見ていた。

顔の拳を一撃かれてやりたい気分になったが、これでも雇用主だと堪える。

「言っておきますが、私は戦う以外の選択肢がないから戦ってるのです。敵が何であれ「命」あるものは戦わずして生きられない、生態から始まり主義・主張・信仰に正義に理念……多様性がある以上、絶対はどこかでぶつかりますからね。回避する手段もなくはないし、戦う事で受ける損害もあるでしょう、ですが戦う事でしか勝ち取れないものがあります、だから私は戦うのです。それが私達「ナユタ」が数千年に渡って受け継いできたものなのですから」

思ったよりもしつかりした回答が出てきて少し驚いたが、戦う以外の選択肢がないから戦うのか。

よく考えればそういう家の生まれでそういう者達を見て育った結果なのだろうか。

オレも記憶を無くす前はそういう人間だったのだろうか。

「とうかナインさん、随分ナイーブとうか夢見がちですよね。傭兵つてもっと何も考えて無くて戦えればそれでハッピーか人を撃つのが趣味みたいな人種の仕事だと思わんですけど」

「失礼すぎるなお前、オレはこれでも考えて傭兵をやってるんだ」

「アマネお姉様は傭兵なんて考え無しで無礼なのが売りって言っていましたか」

「本当に失礼な事しか言えないのかお前は」

悩みなんて無い、そんな様に見えるハレルのあり方が少しばかり羨ましく見えた。

chapter 2—05

グツグツに煮えたぎる溶岩の上を飛ぶ、時折巨大な蛇の様な怪物が上を飛ぶドラゴンの出来損ないの様な怪物を捕食する為に飛び出す。

おまけに亡者の列が絶え間なく崖から身投げしている。

ハレルが作った対環境用シールドが無ければとてもではないが、こんな地獄の様な場所に一秒たりとも居たくない。

腐食性を持った危険なガスも、毒の泉の水もまるで当然の様に防御し、オレ達は探索を続けていた。

ときおり襲い掛かってくる怪物は今の所、そこまでの脅威ではなくブレードだけで対応できるぐらいのものばかり、しかし気を抜く事は出来ない。

遠くの空に浮かぶ巨大な六本の塔、さらにその上に広がる巨大な影、それは建造物ではなく途方もなく巨大な「怪物」とその足だった。

あまりものスケールの違いにオレは驚愕した、さすがのハレルも「今は放っておきましよう」と手出しを躊躇したぐらいだ。

それはいくら対環境シールドがあっても、それでも防御しきれないレベルの汚染や危

険地帯もある。

今まさに下に広がる溶岩は純粋にその火力でこちらを焼き尽くさんと吹き上がり、暗黒物質の沼地は触れれば凄まじい勢いでエネルギーを吸収する。

この様子では向こう1000年どころか10万年後でも死の星のままだろう。

一体どれほどの戦いがここで繰り広げられたのだろうか。

「それで、今はどこに向かっているんだった？」

「北の大神殿ですね、アレアスティアさんが言うにはここも球状惑星ですからね、ちゃんと東西南北あってわかりやすいですが。貰った地図とはもう似ても似つかないのが難点ですね……」

ハレルの目の前にはホログラムモニターが表示されており、そこには青と白の地図と、現在地と向きを示す赤い矢印が映っている。

オレにもマップは入っているが、こんな右も左もわからない様な場所で行き先を決めるのは遠慮したいのでハレルに任せている。

「……ナインさんは行って見たいところとかないのですか」

「ないな、正直今すぐにも安全地帯にでも戻りたい気分だ」

「そうですね……」

「がっかりしたか？」

「……そうですね、少し」

ハレルは少しばかり残念そうにするが、オレとしては冒険という楽しみもこの景色を見れば瞬く間に失せてしまう、確かに多少の危険は伴うだろうが、これは多少という段階を超えている。

「私も昔は冒険なんて、まるで興味もなかったんです。でもたった一人だけ、私を無理矢理に連れ出してくれた人がいました。初めての冒険はまあ、その凄まじい所で……まるで暗黒の世界とでもいわんばかりの場所でした。しかし二人での冒険はとても楽しくて、それから私はこうした冒険が大好きになつてしまつたのです。だからナインさんにもせつかくだから楽しんでもらえそうな世界を選んだつもりだつたんですけど……」

「なんか悪い、という気持ちにさせようとしているが……お前がこの地獄の様な景色を見て宝の山だつて喜んでたのは忘れてないからな」

「ちつ」

なるほど、またハレルの一面がわかつたぞ。

「つまりは楽しい冒険がしたいから、オレを誘つたわけだな」

「そうですね、正直ナユタの方々と一緒に行くとは慎重すぎて全然楽しくないんですよ、心が躍らないのです。だから他の人に期待したのです」

「それで今は心が躍っているのか？」

「半分ぐらいですね」

しかし、その最初に連れ出した奴との冒険が楽しかったのなら、またそいつと行けばいいという言葉が出掛かって、飲み込む。

こいつの性格なら間違いなくそいつが「居るのなら」そいつと一緒に行くだろう。

つまりは、今は一緒に冒険できない訳があるのだろう。

「ナインさんは相変わらず、やさしいですね」

「何がだ」

「いいんです、さあそれよりもそろそろ神殿が見えてくる筈ですよ。もっとも残っていたなら……ですけれど」

いつものアホ面とはまた違う笑みを浮かべて会話を切り上げてハレルが進行方向に指を刺す。

そこには、確かに巨大な建造物の様な影がある。

この距離から見えるのなら相当巨大な神殿なのだろう。

ふと、遠くでキラリと何かが光ったような気がしたかと思えば直ぐ隣に飛んで居たハレルがオレを掴んで降下した。

その直後にオレ達の真上を「魔力」の光線が通過した。

敵だ、それにこの光線には覚えがある。

ユニオンの魔法少女、エリル・フィア・エルルートが使っていたものだ、つまり敵はほぼ間違いなく「ユニオンの魔法少女」だ。

「どうやら先客が居たようですね、どうします」

「お前は どうしたいんだ」

「私としては別に戦いに来ている訳ではありませんが……向こうはやる気ですよー」

先ほどの光線とはまた別に赤い煌きが降り注ぐのでそれを回避して咄嗟にそれを切り捨てながら下降して身を隠す。

まるで細長い花びらの様なそれはオレの持っていたブレードに突き刺さり「腐食」して溶解させていた。

聞いた事がある、ユニオンには「装甲殺し」の魔法少女が居ると。

「最悪だ」

そいつの名前はリコリス、フルラージュ・リコリスだ。

フルラージュとはユニオンの魔法少女の中でもトップクラスの者にのみ与えられる最強のモデル、アライアンスで太刀打ちできる魔法少女は数える程しかない。

「最悪ですね、知り合いです」

「ああ……ああ!?知り合いです!」

「ナユタにも離反者はいると前にいいましたね?」

「ああ、聞いた気がする」

「私の先輩のナユタ・アカリって方です、師匠であるアマネお姉様と同期で……その、アマネお姉様と比較され続けてグレて家出した方です」

「とんでもない場所で再会したな、それで身内なら……」

「逆に殺しに来ますよあの人なら」

「最悪だな」

再び魔力の高まりを感じて、その場から離れて光線を回避する。

続けて見通しが良くなった場所に向けて赤く細長い花びらが矢の様に突き刺さり、周囲に毒を振り撒いていく。

「こちらを燻り出すつもりだ。」

「勝てるのか?」

「まあ半々です」

「それはオレを含めてか?」

「やる気ですね、ナインさんを含めれば7割ぐらいです」

「上等」

障害物を盾にし、神殿に近づきながらハレルと意思確認をする。

このまま放っておけば間違いなくオレ達の調査の邪魔になる、とにかく話し合うにしてもある程度こちらの力を見せて交渉の席に立たせる必要がある。

「殺さない程度にやっつけてしまいましょう」

異郷の跡地で、魔法少女同士の戦いが始まる。

オレにとつての「日常」が。

だが今日は特別だ、頼れそうな仲間がいる。

「背中から撃つてくれるなよ」

「安心してください、私は約束はそれなりに守る実績はあるので」

chapter 2—06

世界はそれこそ無数にある、その内でオレ達が立ち入れるもの、あるいは知る事が出来るものなどほんの一部でしかない。

だが同時に、繋がりやすい世界というものもある。

アライアンスとユニオンが異なる世界でぶつかり合う事があるのも、それが原因だ。こうした異世界で魔法少女同士の戦闘が起きるのも、少なくはない。

そして互いの勢力間の監視が届かない場所では、ルール無用の殺し合いになりがちだ。

「加減をする必要がないからと言って、汚染を撒き散らすのか奴らは」

「いえ、コレでも向こうは加減してるでしょうね、おそらくまだ此処でやる事があるのでしよう」

瓦礫を壁に武装のセッティングをする、使い物にならなくなったブレードを捨て、それぞれの武器を対魔法少女用にセッティングしているうちにも、向こうは絶え間なく赤い毒の花を降り注がせ、周囲を赤い煙で覆っている。

「これをサブマシンガンの銃身に取り付けてください。エレメントエンチャントシステムの試作品です」

「オレのは通常弾、あまり効き目は無いぞ。どうなる？」

「魔力フィールドによって帯電して、バリアコーティングを削ります」

「なるほどな」

ハレルから渡された三本の発振機がついたオプションをサブマシンガンの銃口を中心にする様にして装着。

一方でハレルの武器であるアサルトライフルは各部から青白い光が漏れており、明らかに通常の武器ではないであろう事が予想される。

「本当にアサルトライフルなのかそれ」

「アサルト・バスターライフルともいいますね、こうみえても魔法銃ですよ」

「どのぐらいのペースで撃てる？」

「可変なのでそちらにあわせませす」

「よし」

互いに対魔法少女戦闘準備は整った、幸いこちらは対環境シールドシステムのおかげで防御力も上がっている。

敵は今の所二人、フルラージュ・リコリスのナユタ・アカリともう一人、エリル……

かはまだわからないが同じタイプの魔法銃を使っている者。

「戦闘開始だ」

隠れていた瓦礫が吹き飛ばされるのを合図にオレ達は飛び出し、まず返礼のレールガンを撃ち込む。

こっちの女神様のおかげでこの世界の法則に調整できている為、寸分の狂いもなく狙い通りに弾体は飛び、神殿の一部を吹き飛ばして衝撃波で煙を上げた。

その一瞬の隙に全力で前進、距離1700メートル、ハレルがオレよりも早いのが少しショックだったが予定通りに距離を詰めていく、

しかし向こうもバカじゃない、進行方向を読んで花卉弾を先置きして飛ばしてきていたし、加えて少し威力の落ちた稲妻が次々と飛んでくる。

オレは地面ストレスまで下降、ハレルはさらに高く上昇、二手に分かれながら次の攻撃の手を選ぶ。

するとオレに向いていた攻撃は一気に止み、障害物の少ない真上に上がったハレルに攻撃は集中する。

「お前の予想通りだな、シルフィード」

『お褒めいただきありがとうございます、しかし激突に注意してください』

それはシルフィードの判断だ、正直オレとしては下に降りるのは嫌だったが、シール

ドがあるから問題はないという指示にしたがった結果だ。

オレの居る地上側は薄汚れた瘴気によってエネルギーが霧散しやすく、さらにはヘドの様な粘体がこちらに向けて触手を伸ばしてくる。

それが狙いにくさとなって、向こうは撃つてこなくなる。

だがその分、狙いが集中しているハレルはどうかといえれば平気で先読みして稲妻も花弁弾も容易く回避しつつ、前進していた。

「とんでもないアイツ」

『あれでも、それなりに死線を潜り抜けているとされています』

一方で向こうは変わらずに神殿の位置を取ったまま動かない、というのも恐らくまだこの世界に完全に適応しきれていないか対環境シールドが無いのだろう。

つまり神殿以外は安全な足場として機能していないと読む。

そうすれば地の利がある分、オレ達が少しだけ有利だ。

レールガンを再び構え、二射目の狙いを付ける。

この距離になってようやく敵の姿が見える、黒い着物と赤い髪の魔法少女がおそらくリコリス、そしてもう片方はやはりというかエリルだった。

まさかこんな所で再会するとは思わなかったが、今度こそ勝つ。

瘴気の薄い上空のハレルへ攻撃を続けるリコリスとエリル、優先度としてはやはりリ

コリス、ユニオンの魔法少女の中でもトップクラスの脅威度と聞いている。

それにオレのブレードを一瞬で使い物にならなくしてくれたあの花卉弾は確実に脅威だ。

リコリスの足元をレールガンで撃つ、正直に言えば直撃させても問題はなさそうだが、ハレルが「殺す気ではない」のだから遠慮しておこう。

破砕音と共に足場が吹き飛び、「着弾の衝撃」がバリアコーティングに接触した音がする。

つまりは狙い通りだ。

その間にもハレルは神殿まで迫り着き、エリルにアサルトライフルの銃口を向けながら、停戦を提案していたが、次の瞬間に煙の中から巨大なブレードで斬りかかって来たリコリスを回避してブロードソードを構えていた。

見惚れそうなほどにスマートな動きに驚きながらもオレも遅れて50メートルまで近づき、サブマシンガンへと武器を持ち替えて牽制射撃。

エリルの魔法銃を上手く撃ち抜く事に成功したが、向こうは驚愕しながらもハンドガンを取り出してこちらへ反撃しながら神殿の柱を壁に隠れてしまった。

そしてハレルを支援しようと目を向ければそこでは大質量のブレードが振り回される近接戦闘が行われていた。

リコリスの赤いブレードは瓦礫をまるでケーキのクリームのように切り裂き、それをブロードソードで受け止める様に見せかけたフェイントで回避するハレル。

オレは即座にリコリスに向けてサブマシンガンを撃つが、向こうはそれを容易くブレードを盾にして防ぐ……が一瞬動きを止めればいい、エリルが柱から半身を出して、ハンドガンを撃ってくるのでこちらは回避する。

ユニオンの連中が使ってくるハンドガンは大体が特殊弾頭、油断して当たろうものならどんな事になるか予想がつかない。

「エリル嬢！別に今日は戦争に来たわけじゃないんだが！」

「でもこれだって仕事よ！それに今度は倒すって言ったわ！」

「そもそもこんな荒地に何の仕事だ！」

「言うと思ってるの!?!」

崩れ落ちた天井の残骸と柱を壁にエリルと撃ち合いながらも言葉を交わす、すぐに攻撃をやめてもいいのだが、出来るだけ優位な状態で止めなければ後ろから撃たれかねない。

「後は兵器の実験なら他所でやってくれ！ここには住人がいるからな！」

「住人って亡者の事かしら……！」

「いや、ちゃんとした生きた人間と神様だ！安全地帯に住んでる！」

「……それは良い事を聞いたわ！でも違う仕事よ！」

ピンを抜く音が聞こえる、グレネードだ。

だが投げてこない、いや！

風切り音と共にそれを狙い撃つが、グレネードは空中で爆発した。

目くらましだ。

爆風を切り裂き、ショートソードを持ったエリルが目の前に現れる、オレはジャンプして拳を振りぬいてエリルの顔を殴りつけた。

バリアコーティング同士との衝突音と共にエリルはバランスを崩したまま床に叩きつけられ、転がったのでそのまま距離を詰めて銃口を顔に向ける。

「今回は俺の勝ちだな」

「……サブマシンガンぐらいで」

「通常弾かどうか試してみるか？」

「……っ！」

一方でまだハレルとリコリスの戦いは続いていた、加勢に行きたいがあの中に割って入れる余裕はないし、エリルを放置しておくわけにはいかない。

「本当に今日は魔法少女同士でやりあう気分じゃないんだ、あんたの同僚を止めてくれるか？」

「無理よ、あの人の方が階級が高いわ」

はあ、と思わず溜息が出た。

アレはハレルにどうにかしてもらうしかなさそうだ。

一応は勝ったというのに、なんとも負けた気分になりながら二人の戦闘を見届ける事にした。

chapter 2—07

その赤い刃は斬り結ぶ事すら許さない、一方的に万物を「侵し断つ」猛毒の刃。切り裂かれた残骸の断面は腐り落ちた様な有様だった。

同じナユタの名を持つ二人の互いに一步も引かない戦いをオレは見た。

魔法少女同士の長時間の近接戦闘というのは戦場ではそうそう見ない、というのも大体が一撃離脱……あるいはすぐに決着がついてしまうからだ。

振るわれる猛毒のブレードを決して受け止めず、かならずひきつけた上で回避するハレル。

帯電したブロードソードに対してブレードを割り込ませる事で攻撃の手を止めさせるアカリ。

技量というよりは駆け引きの戦いだった。

しかし、それでも技量的にはハレルよりも相手の方が勝っていて、なんとか食らいつついている様に見える

「はい、まじでございませう」

そして戦いは、ハレルがブロードソードを手放した事で突然に終わった。

「……どういうつもり？」

「アマネさんは言っていました、あなたに本気を出させれば……その場に居る全員が無事ではいられないと、それに私は別にアカリさんを追って来た訳でも、戦いに来たわけでもありません」

二人の視線がこちらに向く、オレはエリルに向けていた銃口を下ろし、手を差し出す……が無言で振り払われてしまった。

ユニオンの魔法少女はプライドが高すぎる。

「加えて言えばこれはアライアンスの依頼でも、ナユタのお役目でもなく「私個人」の依頼なので……因縁や確執なんかはあれど、出来れば本当に戦いたくないのでどうか武器をおさめて貰えませんか」

ハレルが頭を下げるのを見て、向こうは少し考えた後に武器を下ろしてくれた、が納得するまでは行ってくれなかった。

まだ警戒はしているようだ。

しかし、一体二人の間にどんな関係があるのだろうか。

何故、ナユタ・アカリはユニオンに所属し、ここに来ているのか。

「……そうね、仮に今更私を追ってきたとしてこんな所までくる筈も無いわね。それにあなたが本気で私を討ちにくるなら「シラ」を連れて来るわね」

「そもそもナユタは今、かなり酷い有様になってまして、とてもではないですがあなたを討つのに出さざるを得ない被害を許容できないので……」

「いい様ね」

「それに、私としてもあなたの事は今も変わらず尊敬していますから」

「……余計よ、そういう所は変わらないわね……ハレル」

今まで固い表情だったアカリが笑い、ようやく武器を納めてくれた事に安堵し、オレも武器を仕舞う。

被害はブレードが一本と、エリルの魔法銃だけで済んだ。

お互いに死んでないし、怪我もしていないから、互いに引き返せる所でケリがついてよかった。

多くの場合、血が流ればそれだけで、止めるに止められなくなるものなのだから。

「う〜あたしの魔法銃があ……またドヤされるわ……」

とはいえエリルはかなり落ち込んでいる、というのもユニオンの魔法少女の武器はオーダーメイドであつたりカスタマイズなど一品ものが多いと聞いている。

故に武器だけ壊すだけでもそこそこの損害となり、少しの間戦場に出てこなくなる魔法少女もいる。

オレが時間切れ以外で戦場でユニオンの魔法少女を退けられたのは主力武器を壊す

か、手傷を負わせるかのどちらかが殆どだ。

ユニオンは重要な戦力である魔法少女や魔術師を大事にし、武器を失った者はほぼ確実に一度引く。

それでも突っ込んでくる奴は相当にヤバイ奴か、プライドだけが無駄に高い奴のどちらかだ。

「撃ったオレが言うのもアレだが、ただのサブマシンだと油断したな」

「油断なんてしてないわ、ちゃんとバリアコーティングしてあったわ！帯電してるなんて予想できないじゃない！」

ハレルの渡してくれたエレメントエンチャント装置は確かに有用な様だ、魔法銃は結構デリケートな種類の武器故におそらく着弾に加えて電気で内部構造がやられたのだろう。

しかしバリアコーティング越しにダメージを与えられるとなると、これを歩兵に使われると厄介だなという気分にもなる。

一番は被弾しないように立ち回る事だが防御方法も考えておいたほうがいいな。

「それであなただは何のためにこんな地獄みたいな所にいるのかしら？」

「環境浄化の為に使えるモノを探す冒険です」

「……そこも変わらないわね、余程あの子が忘れられ……えっ」

アカリがオレの顔を見て何か驚いた表情を浮かべた。

「あ」

そしてハレルがしまったという表情を浮かべる、それもかなりマズイといった表情だ。

何故か知らないがすごく覚えのあるような気がする感覚だった。

「ねえ、あなたは？」

「ナイン、アライアンスの傭兵をやっている」

早足で彼女はこちらに寄ってきてオレの方に手を載せた、その表情は笑顔だというのに逆らえない様な圧があった。

オレの中の何かが警鐘を鳴らしているが、それが何かわからない。

「そう、思い出せる限り最初の記憶は？」

「あのアカリさん……！ちよつと！ちよつと待って！その人はただの傭兵さんで」

「黙ってなさい、ハレル」

止めに来ようとしたハレルを殺気で有無を言わさず黙らせ、再びこちらに熱い視線を送る彼女に疑問が沸く。

オレはナユタ・アカリと会った事などない、こちらが一方的に戦場で怖れられている「フルラージュ・リコリス」を知っているだけ。

加えてオレもそんなに名の売れた傭兵ではない。

だというのに彼女はまるで、オレを知っている様で。

「オレは2年以上前の記憶がない、もしかしてあなたはオレを知っているのか？」

「そう、そうよ……知っているわ。アレに雇われたのはいつ？」

指差したのは本当にマズイという表情をして固まっているハレル。

「つい先日だが」

「よかつたわね、ハレル。あなた死ななくて済みそうよ」

勘か、強化された感覚か、鼓動が少し早くなるのを感じる。

「教えてくれ、オレの何を知っている？」

「そうね……あなたの過去とか」

何故、ユニオンの魔法少女がオレの無くした過去を知っている？

いや、思い当たる節はある……「過去」だ。

ナユタ・アカリはかつてナユタに所属していたという「過去」がある、いつまで所属していたのかは知らないが、つまりその頃にオレを知っていた。

そしてそれをハレルは知ってて黙っていたという事にオレは気付いた。

「ハレル、お前は知っていたのか？」

「……はい」

ただただ困惑と疑念ばかりが積もる。

だが同時に納得もあつた、ハレルがオレを選んだのはオレを知っていたからだ。

どうして黙っていたのか、一体オレの過去に何があるのか。

オレはそれを知らなければならない。

例え知らない方が良い事だとしても。

Campaign Mode Chapter 3
chapter 3-01

過去を無くしても人は生きていける、けれど過去は決して消えはしない。

そしてオレの前に過去がやってきた。

聞かないという選択肢もあるだろうが、オレはかつて何処の誰だったのか知りたい。

下手な真実ならば知らない方が幸せかもしれない、知る事で逃れられない運命に巻き込まれるかもしれない。

だが知らずに巻き込まれるよりはマシだろう。

破滅から二千年の時を経て、神殿の中は外とは違い神聖な空気を保っていた。

精巧な彫刻や石像は朽ちぬままに美しさを保ち、青空の見える中庭には草花や木々が生い茂り、泉が湧き出していた。

しかし進むにつれて破壊痕が少しずつ現れ始める、そしてもうここにはそれを修理するものも居ないのだとはつきりわからせられる。

そして目に入ったのは調査ドローンの一団と見慣れた機械文明の証だ。

「ハイハイ」

話すにしても、あんな場所ではなんだとアカリに連れられてきたのはユニオンのこの世界での仮設拠点、幸いにも他の人員は居ないらしい。

いつもなら何か言いそうなハレルも今は静かで、顔を見てみればはつきりと「浮かない」と書いてある。

オレは別に過去を知っているのを黙っていた事に対して怒りも憤りも感じていない、むしろ口の軽そうなハレルが話さないという事は相応の理由があったのだろうというのはわかる。

しかしオレは知りたいたいのだ、オレが何者だったのか。

「椅子は三つしかないわ、ハレルはコンテナにでも座ってなさい」

「ハレルに対しての扱いが雑じゃないか？」

「いいのよ、むしろその悪ガキを地面に正座させないだけ慈悲深いつもりよ」

「あの、アタシはこれ居ていいのでしょうか？アカリさんのプライベートの問題ですよ？椅子をハレルさんにお貸しした方が……」

「むしろ居て欲しいわ、恥ずかしながらナユタの人間は私も含めて突然熱くなる事があ
るから」

気まずそうなエリルがひどく不憫だが、また一つナユタについての知識が増えた。

ともかく場は揃った、覚悟は出来ている。

「ナイン……先に断っておくわ、ごめんなさいね。かなり残酷な事を言うわ」

アカリの表情は真剣そのもので、相当なモノをオレは覚悟しなければならぬ様だ。

「構わない、覚悟はもう出来ている」

「そう……それとハレルも話す準備はしておきなさい、私が知っている事はそう多くないから」

「……はい」

いつものような明るさを感じないハレルに違和感を感じながらも、オレはアカリと向かい合う。

「貴女は死人よ、私の妹分で、ナユタの巫女で、そのハレルを冒険に連れ出していつも騒ぎを起こしていた悪ガキコンピの片割れだった……4年前までね」

戻らない昔を懐かしむ様に語りながらも、寂しげな表情で告げられたのは思いのほか衝撃的な事実だった。

「オレも悪ガキだったのか……しかもそのバカを冒険に連れ出した親友というのは……」

「ええ、秘蔵の道具を持ち出して異界に旅に出て、妙な呪いを貰って来たり、他の組織に被害を与えたり、それはひどいものだったわ。それで最後にはあっさり死んだ貴女よ」

「でもオレは現に生きています」

心臓は鼓動を打つてるし、体温はある、そして感じる心はある、オレは生きています。

「そうね、今の貴女はね……その子の体をそのまま使つて作られた人造人間よ。だから過去なんてないの」

「なるほど、衝撃を受け過ぎてどう反応していいかオレにはさっぱりわからない」

「巫女や神官の力は死んでも体に残る、それに加えてナユタは年がら年中荒事だらけ、産んでも育てても間に合わないわ、だから死体を再利用して作ればいいって発想に至ったのよ」

「倫理感というものはないのか」

「少しだけしかないわね、一応は他人の死体を混ぜたりして外見を変えたりして「別人」として扱うぐらいには」

「余計に酷いだろうそれは、エリルを見てみる、ドン引きしているぞ」

顔を真っ青にして、本気でいたたまれない顔になっていくエリルを指差すと、アカリが申し訳なさそうにエリルの頭を撫でていた。

「私自身もそうやって作られた存在よ、それで自分が死んだ後に自分の体を使つて知らない誰かを作られるのが嫌だから私はナユタを出たの」

「もつともな理由すぎる、オレも嫌だなそれは」

なるほど、オレ自身についてはなんとなくわかった。

正直驚いたが、ホムンクルスや人造人間など今日日珍しい事じゃない、人間の死体を再利用という倫理感の無さがあまりに酷く冒瀆的だが。

しかし、そこで新たに疑問が出来た。

つまりオレの今の年齢は何歳だ？

「3年前……魔法少女システムが丁度開発されていた時期、それは酷いゴタゴタがあったの、内部紛争といってもいいわね。そこでナユタから離反者や離脱者が多く出た、貴女が持ち出された……あるいは連れ出されて、私は仲間を弔う事も出来ない組織に嫌気が差してユニオンへ行つた。そして今日、過去の姿のまま現れたあなたに驚いた訳よ」なるほど、前にハレルが言っていた離反者や離脱者の話と合致するな。

そうして連れ出した連中が潰されて、オレは事情を知らないアライアンスに拾われたという訳か。

つまりオレは三歳児なのか。

「はい」

「ばぶじやないの、それでハレル……貴女の申し開きは？」

そういえばまだあった、オレを雇ったハレルだ。

「……アカリさん達が去った後にもナユタの中で様々な争いがありました、特に魔法少

女システムを開発していたチームの中には非人道的な者もいて」

「ナユタに人道……？」

今までの話を聞いてると人道のじの字もないようだが。

「逸らさないでください、ナユタはあくまで自分の組織の中での犠牲は許容しても、無関係の他人を巻き込む程非道ではいけないのです。攫つて来た子供に危険な実験をした上に大事故を起こした上に魔法少女システムをアライアンスに持ち出した者達を裏で操っていた裏切り者との戦いや外部組織との交流を通じて、ナユタは大きく浄化されました。しかしその間に失われたモノは多く、特に人手が足りていません」

確かに離脱者が多く出た上に裏切り者との戦い、さらには荒事も多いと聞いた、確かに死体から人間を作れても手が足りなくなるだろう。

「つまりオレをナユタに連れ戻す為に近づいたのか」

「いえ、仕事がとんでもなく過酷で……本気でギチギチで息苦しくて……それで外回りしてきますという名目でアライアンスの傭兵さんを雇って異世界への冒険に行こうと思つてハヤテさんに連絡したんです、そしたらハヤテさんは「興味が無いからこの中から好みの傭兵を選べ」つて言つてリストをくれて、そこでナインさんの姿を見つけたんです……親友の姿を」

「……つまりは……」

「ナインさんと……いえ親友だった「カガリ」ともう一度冒険が出来るって思つて、嬉しくなつてしまつたわけです」

親しい相手の居ないオレにはよくわからないが、それはきつと真つ当な感情なのだろう。

死んだ者にもう一度会いたいというのは。

だが現実として、オレはそのカガリという人間ではない。

例えその体を使つていても、だ。

「オレは、お前の親友ではない」

「初めて会つた日に、それは十分という程に思い知りました。だから今はきちんと貴女をナインさんとして扱つています。その為の契約ですから」

ハレルのその笑顔は寂しげだけれども、決して心の弱つた人間の見えるソレではなかつた。

過去はやつてきた、だがそれはあくまでオレの生まれを知るだけのものであつて、オレの生き方や在り方を決めるものではなかつた。

それはそう悪いものではなかつた。

「ああ、オレはナインだ。お前に……ナユタ・ハレルに雇われている傭兵だ」

chapter 3—02

オレに過去なんてものはなかった、だが過去はオレとハレルという魔法少女を巡り合
わせた。

ただ傭兵のオレが言うのもなんだが死体を材料にした人造人間というのはさすがに
倫理感が無さ過ぎる。

ネクロマンサーでももうちょっと死者に対して優しいんじゃないか？

「それで要するにハレル、貴女はお役目が過酷すぎてサボりたいが為に外回りになった
訳ね」

「端的に言えばそうなります、いや無人機とかホムンクルス導入しても本当に人手足り
なくて……立ってるのなら客ですら使えつてぐらいで……」

「だったらナユタから抜けてしまえばいいのよ、あなたもユニオンに来なさい」
「いえ……一度抜けようとしたらアマネさんに殺されかけたので……」

話には知らないナユタのイメージがどんどん危険な組織へと染まっていくが、少
なくともハレルがオレを連れ戻しに来た訳でなくて本当によかった。

アライアンスでももっと人間に対しては優しいぞ。

「それで……先ほども言ったとおり、私達は地球の環境再生・汚染浄化の為に使えそうなものを探してまして、アカリさんの方では何か心当たりありませんか？」

「端的に言っていないわね、ユニオンでも魔術や科学技術で地道に浄化作業はやってるけれど。それこそこちらもある問題を抱えているの、だからその対策を探して異世界を巡ってるのよ」

「その問題って何ですか」

「亡者よ、ユニオンの支配域近くに地獄の門か何かが開いたらしくて亡者の類がどんどん溢れてきているのよ」

思ったより向こうも切迫した問題を抱えていた、地獄の門が開いたってなんだよ。

オレ達の周りはどうしてこうも死者にやさしくないんだ。

「亡者ぐらいどうってことないじゃないですか、燃料にでもしてしまえばいいじゃないですか」

「あのハレルさん、ユニオンはそこまで倫理感の無い組織ではないわ！きちんと浄化砲撃で消し飛ばすけれど、それは亡者達を眠らせてやるためよ！」

今まで静かになってたエリルが思わず口を挟むほどの倫理感のないアイデアにオレも頷く。

とにかく亡者というのはよくない、対立して戦争で死体を製造するアライアンスとし

てもいつ自分の領域で亡者が発生するかわからない。

そうすると対策の為にまた税率が上がってしまう。

「つまりはオレ達はどちらも浄化用の道具を探している訳だな？それは協力できるんじゃないか？幸い、今のオレはアライアンスの指示じゃなくハレルに雇われて動いている」

「そうですね、ナユタとしてもアライアンスとユニオンの対立は特に不干渉ですし、そもそも浄化装置が一つしかないとも限らないので協力したいと思いますよ？」

オレとしてもあくまでアライアンスで仕事をしているだけでユニオンが憎くて戦っている訳じゃない、一部にはそれこそ「自由」を守るために戦っている者達がいるが、別に共に肩を並べる事自体に異議はない。

「どうしますかアカリさん」

「……そうね、いいんじゃないかしら。少なくともこの二人は役に立ちそうなのは間違いない、それによつぽどでもない限りは他組織の魔法少女と協力してはいけないというルールはユニオンにはないわ」

「それじゃあ……」

「ええ、よろしくお願いするわ。ナイン、ハレル……だけどこれは一時的なものよ、ユニオンとアライアンスの兵士として戦場で会った時には普通に殺していくから、そこは勘

「違いしない事ね」

きちんと分別のある相手で助かった、この地獄めいた荒廃世界を二人だけで探索するのは間違いなく骨が折れるところだった。

「……どうして私の周りの人は皆おかしいの……まともなのはアタシしかないの……」

うつろな目で呟いているエリルの気持ちはわかる、元身内だとしても手加減したくなるが普通の人間だ、確か生き別れの姉妹の魔法少女が戦場で再会した結果ひどいことになったという話もあつたぐらいい。

「大丈夫だ、エリル。オレもまともだから」

「アンタが一番信用できないのよ」

「ウソだろ」

倫理感が薄すぎる二人はともかくオレ自体は真つ当なアライアンスの魔法少女だぞ。

信用には人一倍敏感な積もりだが……。

「だってアンタ三歳児じゃない……」

概ね真つ当な理由だった、確かにさっきの話の聞いていればオレが三歳児だというのはわかる。

とはいえこんなに戦えて頭のいい三歳児など普通はいない筈だ。

「大丈夫よエリル、実年齢三歳でも最低でもナユタ製の人造人間には最初から十歳児程度の精神と最低限度の情報転写が行われるし、そこのはアライアンスで仕事ができている程度の実績はあるわ」

「そうなるよアカリさんの年齢が気になりますけど……!」

「私は17歳、ちゃんと17年生きているわよ?ちなみにそのハレルは普通の人間の生まれだから14歳、つまり一番年下なのはナインという事になるわ」

普通の生まれからアレになるのか……ナユタつてもしかして人造人間の方が真つ当な人間が多いのではないか?

それに常識がクソの役にも立たないぐらいに色々知ってしまったな……。

「あ、ちなみにですが人造人間の作り方としては昔はフランケンシュタインの怪物みたいに使えるパーツの切り貼りキメラだったんですが、今は分解して素材……神話で言う人間を作る為の粘土に変換してから整形して創りますので、時々一人から二人作れたりするんですよ」

「なんでそれ説明した?というかその作り方だとほぼそのままの姿のオレは何だ?」

「おそらく足りないパーツをその「肉粘土」で補充したんだと思います」

「そんなプラモデルやフィギュアじゃないんだぞ」

勘弁してくれ、本当にこいつらの常識は一体どうなっているんだ。

「それと治療用に今も持ってきてますよ、肉粘土。見ますか？」

「いらない、もつといえどもしオレがなんらかの理由で死んだらちゃんと火葬してくれ」
「ナイン……わかったわ、アンタが死んだらちゃんとおタシが処分しておくから……代わりにアタシが死んだ時はアンタがアタシをなんとかしてね」

「すぐく嫌な理由でユニオンの魔法少女と通じ合える事になるとは思わなかった、オレは自分の過去は知りたいたいといったが自分の製造工程まで知りたいたいとは言ってもないし思っても居なかったのに、最悪だ。」

「けど私はエリルが死に掛けたなら私は肉粘土を使って治療するからそのつもりで居なさい」

「勘弁してくださいアカリさん」

かつて敵対した相手に心の底から同情したのは初めてだった。

chapter 3—03

ユニオンの魔法少女の多くは自らの使う装備からコアの設定まで自分でカスタマイズしている。

その為に他人に設定を委ねる事はまずありえない。

まだこの世界で活動する為の対環境シールドを持たない二人の為に改修の為のデータを渡し、オレ達は一足先に探索に戻った。

この世界の探索においては協力する事にはなったが、何も四人で固まって行動するものではなく、設備やデータの貸し借り、あるいは戦力が必要になった際に助けを呼ぶという形の協力に決まった。

というのも、エリルが「頭おかしいのが三人もいるのが無理」と泣き付いた為だった。

考えてみれば四人中三人が身内で固まってる中で一人だけ部外者だと居心地が悪いのは当然だろう、だとしても正直オレがおかしい奴に分類されているのは不服なんだが。

そういう訳でハレルと共に地獄の様な荒野の上を飛んでいる訳だが、この世界の亡者

は土から生えてくる様だ。

前に火口にどんどん身投げする亡者は見たが、次から次へと亡者達が地面から生えてくる光景はある意味衝撃的だった。

一体どれくらいかの死者がこの地に埋まっているのか、それともオレ達の世界の様に死体がなくとも発生するのか、いろいろ気になる事はあるが……この量の亡者を相手しているとそれだけで時間がどんどん食われていきそうだった。

「それで次はどこに向かつてるんだ？」

「これを見てください」

ハレルから通信で送られてきたマップデータが目の前に現れる、それは女神アレアスティアから貰った地図に様々な注釈、ここまで通ってきた結果どうなっているか、そしてアークの守護領域範囲までが「最新のモノ」に書き換わっていた。

「お前いつの間に」

「私一人でやったわけじゃありませんよ？ねえシルフィード」

『はい、私がやっておきました。まったく因縁も何も無くて手持ち無沙汰だったのです』

「シルフィードの入ったカーバンクルのコアと私のエンジェルモデルはネットワーク接続しているのです、見てきたデータを全部記録してるんですよ。それを貰った地図を元に再構築した結果です」

『運用補助システムとして当然の事ですが戦闘以外にもこうしたマツピングや情報の更新、果ては簡単な助言などにも対応できるように私達は設計されていますので、ご安心ください』

なるほど、ハレルと話している間ずっと静かだったのはこういう事だったのか。

「ありがとう、助かったよシルフィード」

『どういたしまして、それだけでやった甲斐があります。それで次の目的地ですが、ユニオンの方々が拠点とした神殿以外にも同じ様な神殿が各地にあります、その数は全部で七。神殿内で得たデータによればこの星のレイラインに沿って建てられているそうです、現在向かっているのはその起点である「第一」の神殿です』

レイライン、と言うのは確か龍脈などといわれる大地のエネルギーの循環の事だったと記憶している、魔術師の中にはこれを利用して莫大なエネルギーを運用する事が出来る者もいるというが、オレ達の様な魔法少女にとってはあまり馴染みのないものだ。

「多分よくわかってないだろうから捕捉で説明しますと、そのレイラインが多く交差する地点に神殿を建てる事で星をコントロールしていったんだと思います。そこに行く理由なんです、この世界はあまりに問題点が多すぎてどこから手をつけていいのかかわらないので、改めて「順番に沿って」行って見ましようという事です」

なるほどようやく合点が行った、この世界は管理するものがない無秩序状態、管理

者がいればある程度マシにはなっていくし、現状維持でもそれ以上に酷くなる事はそうそうない。

「つまりは出来そうならその神殿を掌握して、立て直し出来る様にするわけか」

「まあでも私達がやるわけじゃないですよ？アレアスティアさんにやる気があるのなら出来る様に情報を持って帰るのぐらいです、むしろそういった神殿の周りはおそらく激戦地になった筈ですから、そこを漁るのがメインです」

「一瞬見直しかけたのにな……」

「神々の殺し合いなら恐らく相当な呪いのついた武器なんかが転がっていて、それがレイラインを経由してこの星を汚染している……と考えればむしろ水源に置かれた汚染源を取り除くという意味ではそれが優先されませんか？」

「やっぱり見直したわ」

「こいつは本当に考えているのか考えてないのか怪しくて、どう判断すればいいのか本当に困る。」

「少なくとも理には適っているし、オレはそこまで思いつかない上にそもそも雇われただけからな。」

「そうしたらまた採掘の間の守りをすればいいのか？」

「ええ、またお願いします。昔は逆だったんですけどね」

「オレはあんたの親友じゃない」

「違いますよ、私が見張り番だったという事です。そんなに不機嫌にならないでくださいよ」

「そんなことはない」

誰だつて知らない他人の影を見られても困るだろう。

いや……オレが無駄に意識してしまっているだけか、どうせこいつは何も考えていないのだろう。

余計な一言を言うのも、聞いても居ない情報をペラペラとしゃべるのも、そういう癖か。

「それよりもだ、この世界に浄化に使えそうなものになかったならどうするんだ？」

「まあ普通に強そうな武器とかだけ貰って、残りはアレアステイアさんに渡して帰るだけですよ。遺物は好きにしてもいいって言質はとりましたからね」

「そうだが……もつとこう、あるだろ!？」

「ありませんよ、あつてせいぜい私達の世界にまで影響しそうな多少ヤバそうな奴を始末しておくぐらいじゃないですか」

最初にこの景色を見た反応といい、良識というものはないのかこいつには、少なくともアークに住んでいる人間達が出て最初に見るのが、この地獄みたいな世界と考えると

オレでも少し可哀想だと思うぞ。

「……………ええー?」

「なんだ、その笑いを堪えた顔は」

「私はびつくりしてますよ、戦場で敵を冷酷に刈り取るアライアンスの魔法少女が、そんなに慈悲深いとは」

「馬鹿にしているのか」

「バカにはしてません、ただ……………ただ……………そう、昔を思い出しただけです」

「だからオレはお前の親友じゃ……………」

「昔の私自身を見ているみたいだなって」

絶対が無いな、こいつに思いやりや良識のあつた時代なんて想像できない。

「ま、そんなことよりもう直ぐ見えてきますよ、「泉」の神殿が」

chapter 3 | 04

神殿というよりそれは塔だった。

天に向かって伸びる巨大建造物、それが「始原の泉」と呼ばれる「第一の神殿」の姿だった。

今でこそ酷く汚れてしまっているが、全盛期は一体どんな姿だったのだろうか

そしてその周囲の大地は腐食性の暗黒ガスで覆われており、とてもではないが亡者すら入れそうになさそうだ。

「思ったより……汚染の蓄積がひどいですね」

「どうするんだ」

「直接、神殿に乗り込みましょう。ちよつとこれは手に負えませんのでスルーで」

こいつでもちよつとは躊躇うぐらい、となると余程に酷いのか。

一体何をしたらそんなレベルまで汚染されるのだろうか？

神殿の入り口もまたガスによって封鎖されている、となると確実なのは塔の上に降りる方法だ。

しかし周囲にはなにやら羽根の生えた人型の飛び交っている。

念を入れて戦闘準備は怠らない。

「準備は出来ている、そっちはどうだ」

「ええ、問題なく。恐らく察しの通り、塔の上から侵入して下へと調査していく形で行きましよう」

見上げれば帯電する暗雲、見下ろせば腐食性のガス、どちらにも接触しないように気をつけないとならない。

感覚を研ぎ澄ましても感じ取れない闇の中から何が飛び出してきたても問題ない様、両方の中間地点をオレ達は飛行する。

そして塔の周りを飛び交う影の正体が見えてくる、それは痩せ型の悪魔だ。

かつて神聖であったであろう場所を汚す様に邪悪なるものが巢食っていた。

それらはオレ達を見るなり、こちらへと近づいて来ていた。

敵意は感じないが、悪意は感じる。

どうするとハレルの方を向くと既にハレルは銃を構えていた。

キーンと特殊な音を奏で、銃口から伸びた光が空を走って悪魔達を焼き尽くす。

「いきなりか」

「デーモンを生かしておく理由はないので……」

「話をできそうな奴でもか……?」

「言っておきますが、デーモンと話すだけ相手の思う壺なのです。奴らへの理想的な解決手段は暴力なのです」

今の一撃が開戦の火蓋となり、次々と塔の中から飛行型のデーモンがあふれ出してくる、それはまさに地獄として相応しい光景だった。

「そら、お出ましです。皆殺しにしますよ」

「そういうものか」

雇い主がやれというならやるしかあるまい、レールガンを構え引き金を引く、空を埋め尽くす程のデーモンの群に穴が開く。

こころも多くいればそこまで狙いを定める必要もないという訳だ。

距離は2キロ、向こうは有効な攻撃手段を持っていないのか飛んでくるのは槍と矢ぐらいだ、もつともそれも貧相なものだ。

「妙に威力がないぞ」

「この世界の生まれのデーモンじゃないですね、おそらく最近引越してきたタイプの連中でしょう。ああいう連中は元居た世界から追い出されることが多いので」

なるほど、向こうも移住者か。

だとすれば容赦する必要はなさそうだ、さすがに現地人を撃つのは気が引けるからな。

距離一キロ、恐れを知らず向かってくるデーモンに対してレールガンを放っていると騒ぎを聞きつけたのか暗雲の中から途方も無く巨大なワームが大地に向けて頭を突っ込む様な形でデーモンの群を大口で飲み込んだ、おまけにワームの表面をみればそれは亡者の集合体で出来ている事が見て取れた。

「あまりにも地獄すぎるだろこの世界」

「手間が省けましたね、でも今はアレの相手をするのは厳しそうなのでこれもスルーしましょう」

「ああ……」

天と地を繋ぐように亡者の長虫が上下する中を高速で駆けぬけ、塔の上を守っていたデーモンをハレルがライフルから放たれるプラズマで焼き払って着地点を確保した。

「ここからは気をつけて行きましょう、今の連中はおそらく下つ端も下つ端……多分ゴミみたいなものです」

「じゃあ次に出てくるのはなんだ」

「もつと質の悪いゴミでしょう」

骨と黒こげのデーモンの消炭、そして腐敗した血肉で汚れた足元に気をつけながら階段を下りて、建物の中へと入る。

そこはまた酷い有様であった。

無数の骨、肉、内蔵で彩られた悪趣味な飾りつけといった最低の改装が行われた掃き溜め。

何のモノかはわからないが精神衛生上まるでよくはない。

『注意、空間法則が歪んでいます。気をつけてください、此処から先はまた異世界です』
シルフィードの警告の通り、所々空気が色が違う上に赤いエネルギー光が無軌道に溢れ出している。

踏み込めば、バリアコーティングにシールドの上からでもわかるほどの熱気……いや「殺意」が感じられた。

内部構造も先ほどとはまた違い、肉と骨に加えて機械や白黒の石など文明的なモノも混じる様になり、中には宝石や金銀財宝まである。

だが妙なのはそれらに統一性が感じられない事だ。

「略奪品でしょうね、悪趣味も極まればここまでできますか」

「なるほどな、悪魔らしい」

耳を澄ませば悲鳴が聞こえてくる、言語はわからないが、間違いなくそれは人間のモノだ。

おそらく戦利品としてつれて来た者に拷問でもしているのだろう。

「一刻も早く皆殺しにするべきですね」

「ああ、さっきお前が言っていた事よくわかったよ」

廊下を走りながら向かってきた鎧のデーモンに向けてレールガンをぶっぱなして始末する、リロードしつつ血煙となったデーモンが手に持っていた斧を掴み、後ろに控えていた子鬼に向かって投げる。

一団を纏めて薙ぎ払っていくソレを止めたのは豚の様なデーモンだ。

「ナインさんは豚の丸焼きをどこ存知ですか」

「いや、ないな。加工品しか見た事がない」

豚のデーモン達が道を塞ぎ槍と盾を手に突撃してくる中、ハレルはライフルを構え、引き金を引く。

放たれたのは光ではなく「劫火」だった。

思わずオレですら一歩引いてしまう程の魔力を持った炎が豚のデーモンを、さらにその後ろに控える者達を纏めて舐め取り、この世界から消し去る。

「どんな威力してるんだ」

「対怪物用なので、人間には撃つちゃだめな奴ですよ？」

「そんな武器、誰が作ったんだ」

「ナユタ製ですわね」

「またか」

「これでもまだ不安な威力ですからね」

ナユタは怪物と戦って来たと言いたが、これはもう敵である怪物と殆どかわりない脅威じゃないか？

この威力ならユニオンの魔法少女とやりあっても確実に防衛は突破できそうだな。

「そもそも閉鎖空間だから今みたいな使い方が出来たわけで、外で使えばそんなに頼れないですからね」

「まあ確かに、避けるだけなら出きるだろうし、それなりにチャージにも時間が掛かっていたように見えた、オレならその隙に撃てる」

「そういう事です、飛び道具のある相手だと溜めている間にライフルが壊される事もあるのですよ」

確かに隙はある、がこの威力とはまた別の問題だろうと思いつながら、オレ達は歩を進めた。

chapter 3—05

かつてこの世界の神々が作り上げた建造物は残忍で凶暴、そして邪悪なデーモンの巣窟と化していた。

地獄のテクスチャで塗りつぶされたこの神殿をオレ達は下っていく。

際限無く湧き出してくるデーモン、今の所出てくるのはそこまで強くない、時折魔法を使ってくるものも混じっているものの、オレ達の武器でどうにかなってしまいう程度だった。

だが、数が多すぎる。

「きりがない、これじゃ弾が足りない」

とはいえエンチャントされたサブマシンガンでは威力が不足が過ぎる。

豚のデーモンの首をブレードで刎ね飛ばし、持っていたシールドで小鬼を床に挟んで潰す。

「だったらこれを使うといいですよ」

ハレルから投げ渡されたのは、まさしくレールガンの弾の入ったカートリッジだった。

「なんだ、持つてるなら最初から言え」

「今作ったんですよ」

「……どうやって作ったんだ」

簡単に作ったというが、とてもではないが西部劇の様に鉛を溶かして火薬を詰めるみたいな容易いやり方でレールガンの弾は作れない。

ましてやその道具などハレルの手元には見えない。

「まあ見ててください」

デーモンが戦利品として無造作に積み上げていた剣を取り上げると、ハレルはそれを魔力が包み……分解し「砲弾」へと再構築した。

「もう驚かないぞ」

「簡単な錬金術ですよ、素材さえあればすぐ弾を補充できるので。後でカーバクルのコアに入れておきますか？」

「ああ、頼むよ」

確かに驚いたが、それ以上にそれは便利だ、出先での弾切れの心配が大分減るのは嬉しい。

「あらかじめ登録しておいたモノしか作れないのでそれだけは気をつけてくださいね、それと少し準備してくださいね。少し厄介そうな気配がします」

向かう先は広間となっている、つまりはここまでの通路と違い一気に多くの敵が襲ってくる可能性や、巨大な個が現れるかもしれないという事か。

この生きた肉の建造物が邪魔なものもあるが、オレはまだうまくデーモンの気配が感じ取れない。

さらに耳を澄ませても聞こえる鼓動音や呼吸音の区別がしにくい。

奇襲や裏取りをされない為に警戒はしているが、なかなかやりにくい。

センサーの種類をもっと増やすべきだろうか。

そうこう考えている内に広間に辿り着いたと同時に、鉄檻が来た道を塞ぐ。

別にこの程度なら破壊できなくもない……が、雰囲気としてオレ達を歓迎してくれているらしい。

《招かれざるものどもよ……よくもまあ派手に殺してくれた》

姿は見えなくても闇の奥底から聞こえてくる耳障りな声、それはこちらをはつきりと嘲笑うものだった。

赤い炎が灯され暗く濼んだ空気が燃え尽きて景色がはつきりとする。

闘技場、あるいは処刑場か。

観客席には目玉のついた不気味な肉塊が所狭しとひしめき、天井には真つ赤な太陽の様なものが照明代わりに浮かんでいる。

「ここもまた典型的なイメージの地獄だ、むしろ外よりはマシだとは思う。

《だが我々はお前達を歓迎しよう》

「それはよかったです、私もせっかくなので手土産を持ってきたんですよ」

空間が歪み、炎が溢れ出し「門」となる。

オレとハレルは同時にそこへ狙いを定めて引き金を引く。

轟音と共にレールガンは観客席の一角の肉塊を吹き飛ばし、プラズマは爆発し、門の周囲に炎を撒き散らす。

その中央に立っていたのは黒い鎧を纏い、骨の仮面を被った大男の様な悪魔だった。

武器は赤い光で形成された剣が一振りだけ、だがその圧倒的な威圧感の間違いなく強者だった。

「随分と若いと嘗めていたが、なるほどよくやるものだ……それに片方は我々ですら救いようがない程に業が深いな」

「いわれているぞハレル」

「失礼ですね、業がなんですか。バケモノを殺すのに業なんていまさら気にしてられませんかよ」

向こうも開幕の一撃から警戒しているが、レールガンを剣で逸らすバケモノはオレとしても初めて見た、盾で逸らすバケモノなら知っているが。

これはこちらも一瞬たりとも気を抜けない、アレは間違いなく個として見ればハレルはともかく、オレよりは強い。

しかし、強い相手と戦うのは慣れている。

勝ち目が無い訳ではない。

「ナインさん、援護は頼みますからね」

「わかったが、どうするつもりだ」

「こうするんですよ」

ライフルを手放し、身の丈ほどのブロードソードを片手にハレルが踏み込んだ。

オレは即座にレールガンの引き金を引いて骨仮面のデーモンを撃つ、それは簡単にかわされ、壁にぶつかって赤黒い煙が舞い上がる。

レールガンでは視界を潰しかねない、ハレルに何が見えているのかよくわからない分、それが目潰しになってしまえば致命的だ、即座にハレルが置いたライフルを手にする。

「シルフィード」

『既にセキュリティロックは解除されています、エネルギー転送システムオンライン、装填完了、いつでも撃てます』

レールガンからバスターライフルへ武器を持ち替えている内にハレルがブロード

ソードを縦に振るいながらも後退する、バチバチバリバリと帯電フィールドとバリアコーティングを纏った刃と赤い光の刃が干渉していた。

『射撃モード、収束狙撃を推奨』

反動・ブレがどの程度かはわからない、がやるしかない。

「当たれよ」

どうか精度がいいようにと狙いのままに引き金を引く。

キンと甲高い銃声、腕に負荷がかかるレベルの反動と共にバリアに包まれたプラズマ弾が飛び出し、それとハレルが即座に後ろに飛び退いた。

骨仮面のデーモンも慌てる事なく、その場から真上に跳躍し飛来したプラズマ弾の爆発を回避。

『再装填完了』

だが今ので大体の撃ち方はわかった、パワーアシストをより強化し、さつきよりもしっかりと構えて跳躍して自由落下するデーモンに狙いを定める。

二度目の引き金は着地寸前を狙って撃つ、再び銃声が響き、プラズマ弾が放たれるがそれをヤツは光の剣で切り払い、弾いた。

だがそれを逃すハレルではなく、ブロードソードでデーモンの体を斜めに斬りつけた。

飛び散るのは赤黒い血と炭化した肉片、深く斬りつけたものの両断とまではいかず、デーモンはハレルを蹴り飛ばす。

オレは三度目の引き金を引く、今度は狙撃ではなくオート連射だ。

雨の様に降り注ぐ青白い光弾が次々とデーモンに命中してその肉を焼き削いでいく。動きを止めたデーモンの角を掴み、ハレルはパワーアシストまかせのスイングでデーモンの首を引き千切った。

巨体が力を失い崩れ落ち、床に落ちる光の剣をハレルは拾う。

「まあ思ったよりは強かったですね」

「大丈夫か？」

「ええ、それとまだ終わりではなさそうですよ」

首を失ったデーモンの体が燃え上がり、新たな門が開く。

そこから現れたのは先ほど殺した筈のデーモン、その武器は剣から斧へと変わっており、更に「ショットガン」まで装備していた。

「殺されたのは何百年ぶりか……随分とやるな異界の人間よ、敬意を表して名乗らせてもらおう……我が名は「クルスクレイク」……この城の主だ」

目の前のデーモンから放たれる桁違いの殺気は更に増幅し、まるでこの身を焼くような錯覚をオレは覚えた。

chapter 3—06

クルスクレイクと名乗ったデーモンは先ほどの剣と同じ素材の斧に加えて、水平二連式のショットガンを持ってオレ達の前に再び立ちふさがった。

当然、目の前のデーモンが持つソレはただのショットガンではないだろう、見てから避けれるか、防げるか。

いつでも動き出せる用に警戒しつつ相手の出方を伺う。

一方でハレルはブロードソードと奪った一本目の赤い剣を手に敵と向かう合う。

「なるほど、命のストックですか」

「卑怯とは言うまいな？お前達が人の身でありながら怪物となれる様に我もまたそういうあり方なのだから」

「ならば殺し尽くすまでです」

その言葉と同時にハレルに向けて引き金が引かれ、即座に盾として投擲されたブロードソードが散弾を浴びて惨たらしく鉄クズとなった。

同時に施されていたバリアコーティングが砕け散る音と金属の破砕音が響き渡り、オレはクルスクレイクの頭を狙って引き金を引く。

『破壊力が尋常ではありません、現状のバリアコーティングでは防ぎきれませんので気をつけてください。一方で拡散角度は見た目通りのようです』

「それはありがたい情報だ」

放ったプラズマ弾は回避されるが、一方でハレルも正面にシールドを展開していた為にバリアコーティングで防ぎきれられる程度の被弾で済んでいた様だ。

オレは即座に飛翔し、オートモードでプラズマ弾の雨を降らせる、だが奴は先ほどとは見違えるようなスピードで動きまわり、それを簡単に回避している。

そしてこちらにショットガンの銃口が向くのが見えてオレは即座に急降下、そのまま即座に起動したままにしておいたレールガンに手をかけてマウントしたまま引き金を引く。

さすがにデーモンでもレールガンの直撃は避けたい様で、回避の為に動いた事で奴の照準がブレて、散弾は空を切り壁を穿つ。

そしてクルスクエイクが動いた先には赤剣を手にしたハレルが居た、上段で振り下ろした光の剣と防ぐ為に盾とされた斧が激突し熱波が走る。

隙を与えてはいけない、隙を逃してはいけない、オレは続けてレールガンに持ち換えて引き金を引くが、奴は右腕の斧でハレルを受け止めていながらも空いた左手でショットガンをこちらに向けて引き金を引いていた。

バリアコーティングの爆ぜる音と共に凄まじい衝撃で視界が回り、体が地面に3度打ち付けられ、受身を取る。

耳鳴りがして、視界が定まらない、眩暈も酷いが、体は無事だ。

『レールガン損傷、使用不能です』

「オレの心配は」

『肉体的損傷はありません、感覚の回復に努めてください』

右手に持っていたレールガンはスパークをあげ、完全にショートしていた、これでは使い物にならない。

残念だがデッドウェイトとなるので廃棄して、ライフルに持ち替えて再び敵を視界に入れる。

ハレルは変わらず赤剣で敵に射撃の隙を与えない様に切り結び、敵はどうかハレルの動きを止めようとチャンスをうかがっている。

悔しいが、近接戦においてもオレよりもハレルの方が上手としかいえない。それにあのデーモンもバカみたいに強い。

オレに出来る有効な選択は……。

『コアの出力を調整、近接戦モードへ移行』

引き撃ちはダメだ、切り込まなければ勝利はない。

フロートイングを起動した上で最大出力のブーストで接近、それに相手が気付いてハレルを強く弾き飛ばし銃口をこちらに向ける。

視界がスローになる、感覚が先行する、炸裂音よりも早く上昇、体への負担を無視して二発目の発射を前進しつつ急降下で回避、ハレルが割って入った事で敵の手が止まる。

射程内、オレはブレードを引き抜いた動きのまま、下からショットガンの銃身を打ち上げ三射目を逸らし、敵の姿勢を崩して力の限りの蹴りを横腹に叩き込んだ。

まるで戦車を蹴った様な重さだったが、あいにく本気の魔法少女は戦車の装甲を蹴り壊せるんだ。

デーモンの脇腹が爆せて赤い血肉が飛び散り吹き飛ぶ、痛みに呻く間もなく次にハレルが斧を持つ右腕を切り落として赤剣を骨の仮面に覆われた額に突き刺した。

そうして再びクルスクレイクは力なく血に倒れ落ちる。

体の中に溜まっていた負担が一気に噴出すようにオレは膝をついて戦利品代わりに奴の持っていたショットガンを手にする。

彫刻の施されたソレはとてつもなく重い、奴はリロード無しで使っていたがどうやらこいつは「神器」の一種らしい。

持つて見れば使い方が頭の中に流れ込んできた。

生命エネルギーを流し込んで銃弾を精製するようだ。

内部を途方も無いエネルギーが流れているのがわかった、なるほどレールガンにすら打ち勝てる訳だ。

「さすがに死んだか？」

「いえ、退いただけです、これは」

二度殺したデーモンの体が黒く染まり炭へと変わって、武器を残して崩れ落ちる。

続けて三戦目と行かずに済んで助かった、これ以上の無茶はオレとしては勘弁してほしい。

《まさか二度も殺されるとは思わなかったぞ。さすがに日に三度も殺されては適わん……ここは退かせてもらおう》

引き際というものを弁えていたのだろう、クルスクレイクはその場に復活する事はなかった、が声が脳に響く様に聞こえる事から完全に滅びてはいない様だ。

《しかし、久しぶりに自分で作った武器を振るえるのはたのしかったぞ。『竜混じり』の娘よ、お前の手にするその猟銃も私の作品の一つだ、気に入ったなら使うがいい》

どこかから奪ってきたものかと思えば自作かよ、と改めて手にした銃を見て見れば髑髏面の刻印が施されており、作者である「クルスクレイク」の銘が掘られていた。

ハレルが手にしている剣と斧にも同じ刻印があり、おそらく他の武器も同じく自作な

のだろう。

《さらばだ、またいずれ会おう。竜混じりの娘と業の深き巫女よ》

奴の声と共にズズズと空間が震えたかと思えば、周囲を囲っていた赤い光源や肉の塊、そして闘技場の様な広間といった景色は消えて、薄暗い、神秘的な石造りの広場へと変わっていた。

『空間が安定、先ほどまでいた空間は消失しました』

「なるほど、拠点を丸ごと移動できるのか」

『どうやらこの神殿に流れ込んでいたエネルギーを使って実体化していたようです』

薄明かりとでもいうのか、壁に埋め込まれたクリスタルが優しい光を灯していく。

奪われてたエネルギーが神殿に行き渡るようになったのだろう。

「あーあーあー……」

「どうした？」

静かになっていったハレルが突然に何か呻き出し、頭を抱える。

その表情は何か深刻な事があったわけではなさそうだが、とても納得できないというものに感じられる。

「デーモンの武器の癖にすごい完成度で腹が立つ！もつと雑でゴミみたいな奴なら簡単に壊せるのに！」

「そこかよ」

確かにデザインとしても芸術の様で、機能としては便利という他ない、持ち手に使う方を教える機能までついている。

恐らく武器職人としてのこだわりか何かなのだろう。

「くう……背に腹は変えられませんが、せつかく強いので使わせてもらいましょう。変な呪いの類も無い様ですし……」

ああ、そういうえぼと思えば周囲を見渡すが見当たらない。

破損具合次第なら修理してまた使えそうだったんだが、あの空間に置いてきてしまつたらしい。

結構高かったんだがあのレールガン……。

しかしこうして新しい武器が手に入ったのは幸いだ。

「よかつたじゃないか、神器級だぞ。それに仮にあのデーモンがとんでもない悪党でも、作品に罪はないだろう?」

「気持ちの問題です……」

確かにハレルは何かと作る事を得意げにしていた、やはり製作者としてのプライドがあるのだろう。

ハレルはしぶしぶという表情で武器を納め、オレは逆に少しの高揚と共に神殿の先へ

と進む。

chapter 3—07

少しの休息の後にクルスクレイクの領域となっていた塔を下りきり、オレ達は最下層へと辿り着いた。

外は汚染でひどい事になっていたが神殿の中は清浄な空気で満ちていて、行動するには何の問題もない状態であった。

とはいえ他にも何か居る可能性も考慮し、警戒は怠らない。

外の亡者のワームしかり、脅威となりうるものは恐らくいくらでもいるのだから。

神殿内を照らす青白いエネルギーの粒子は最深部に近づくにつれ、その量と輝きを増していく。

ハレルによればこれは星の中を循環するエネルギーが漏れ出たもので、特に害は無いと言う。

そしてその粒子が溢れ出る場所、神殿の中心へとオレ達は辿り着いた。

「ジエネレーターシャフト……か？」

「でしようね、やはり科学も魔法も行き着けば似た様なモノになる様ですね」

それはオレ達の世界でも見慣れたものだった、大型発電施設や原子炉に魔力ジエネ

レーター、それにエレメントハーヴェスター……様々なエネルギー設備によく似た形状をしていた。

だが一番の違いはそれが唸りも輝きも放たず、大地に空いた大穴から粒子が漏れ出しているだけといった状態だという事。

誰がどう見てもこれは停止しているという奴だ。

「それで動かし方はわかるのか？」

「ええ、簡単ですよ」

「動かして大丈夫なのか？二千年ぐらい放置されていたんだぞ？」

ハレルが近づくと床や天井から台が迫り出し、光を放ち始める、それはコンソールだ。

「アレアスティアさんから遺跡関連の操作権限は貰ってますので」

「初耳だ」

「あー……：そういうえばナインさんは巫女じゃありませんからね」

「……：思い出してみれば女神さんとの初対面の際もお前は話を通じていたな」

「そういう事です、神と話するのが巫女ですからね。それはともかく、アレアスティアさんに遺跡を使う為の権限は貰ってあるので心配は無用という訳です」

光る台の上にハレルが手を載せると床や天井に走るラインに光が走り、ジェネレーターからゴウンゴウンと聞きなれた重音が聞こえ始める。

「おお……星自体は元気ですね、表面が汚染でひどい事になってるだけで」
「そこまでわかるのか」

「ええ、これはすごい……循環管理システムとしての完成度がハンパじゃないですね
……惜しむらくは私達の世界では使えない辺りですね」

「一体何を言っているのか専門知識が無いオレからすればさっぱりだが、とにかくすごいものだというのはわかった。」

「星一つを完全にコントロールしてしまう、人類がそこまでの領域に立つのに一体どれぐらいの年月がかかるだろうか。」

「これでまず、第一の神殿は起動できました……ですが、第二の神殿でパスが詰まってますねこれ」

「どういうことだ?」

「簡単に言えば七つの神殿全部が繋がった状態が正常なんです、隣の神殿に何か詰まってて流れないんですよ」

「思いつかぶのは……先ほどの様な不法占拠している住人。」

「つまりは次はそこを掃除しに行けばいいのか」

「そうですね、その前に私のライフル返してくださいね?」

「ああ……そうだったな」

クルスクレイクの銃とサブマシンガンを持つているオレと違いハレルは射撃武器がなくなっている状態だった、それはよくない。

「なかなかいい銃だった」

「それはどうも、これも私が作ったんですよ？」

「お前本当に何でもできるな……」

言葉通りいい武器だったのでその内、製造の依頼でもしてみようか。

一体どの程度の費用が掛かるのか、それとオレの依頼を受けてくれるかは別として。

「だが、その前に一度ユニオンの連中にコンタクトを取った方がいいじゃないか？ 第二神殿が起動すればそのままあいつらの拠点にまで流れ込むだろう？」

「そうですね……いや多分問題はないと思いますが……まあ報告と連絡は大事ですからね、ちよつとコンタクトとって見ましようか」

そういつてハレルが何故か神殿のコンソールを操作し出すと、ホログラムのモニターが空中に現れる。

映るのは、フルラージュ・リコリス……つまりはナユタ・アカリの姿だった。

「もしもし、アカリさん？ 聞こえますか？」

『聞こえるけれど、一体どんな手品を使ったの？ 通信機器は殆ど役立たずなのに』

「この星を管理する神殿の一つを起動して、その機能を使っています。そちらは今ど

「ちらで何を？」

『亡者の合体した巨人を始末した所よ、それで態々連絡してきた要件は？』

「神殿同士のパスを繋ぐのですが、一応アカリさん達の拠点もその繋ぐ神殿の中に入っているんで、最深部のジェネレーター部分には次の連絡があるまで近づかないでください」

『わかったわ、どういう影響があるかわからないからでしょう？』

「そういう事です」

『了解したわ、それと……私達以外にもまだ誰か戦ってるみたいよ？さつきレーザー系の武器が何かで焼かれたモンスターが残骸があったわ』

「わかりました、その辺りも気をつけるとします」

オレ達以外にも、か。

ユニオンの二人と出くわしたと考えれば他の勢力の人間が居てもおかしくはないが……。

もしかするとクルスクレイクのようにまた別の世界からの来訪者の可能性もある。

できればこんな所で敵対するような相手でなければいいのだが。

「ああ、それとナインさん」

「なんだ」

「さつきはありがとうございます、おかげで無事にあのデーモンを倒せました」

「オレがいなくとも、どうにかなってたんじやないか？」

「いえ、一度目は勝てても二度目は無理でしたね。だからありがとうございます」

「傭兵として仕事をしたまでだ」

「その傭兵の仕事だとしてもです」

仕事振りを評価されるのはいいが、感謝されるようなものではないのだがな……。

「まあいい……とにかく、次の神殿に向かうんだろう？」

「はい」

あくまでオレは雇われで、傭兵だ、それ以上の関係ではない。

そうなるつもりもない。

Campaign Mode Chapter 4

chapter 4—01

《死んだ者は戻らない、過ぎた時間も、終わってしまったものも……わかっけていても受け入れるには難しい、それが人間というものだ。深き業の巫女よ、今は受け入れられぬまま行くがよい。我らの偽りの安寧すら、きつとお前を救いは出来ないのだから》

デーモン風情が知った口を聞く。

《貴女は人々を救う事は出来るでしょう、けれど貴女を救える人は……きつとどこにも居ないわ、例え神でさえも》

異世界の神も大した事ないんですね。

《ハレル……ごめんなさい》

アカリさんは悪くないんですよ、これは私の我が儘なんですから。

《オレに期待されても、できるのは戦う事だけだ》

ナインさん、それでいいんですよ。

私と一緒に戦ってくれる、冒険をしてくれる……それだけでいいのです。

あなたはもうしようもない程にナユタ・カガリじゃなく、もうしようもないほどにか

つてのナユタ・ハレルに似ている。

だからあの日の冒険の続きが出来る。

私がかガリの様に振舞い続ける限り、痛みを耐えていられる。

そしてナインさんが側に居てくれる限り、私は救われ続けていられる。

戦う事しか出来ず、他者に心を開かず、友を持たず、自由であろうとするナインさんの在り方はかつての私そのもの。

だけどわかつている。

あなたの見てきたモノは、あなたの生きてきた戦場も、戦ってきた敵も、奪ってきたものも、かつての私とは全く違う。

いずれ、あなたはナインという人間として成長して、私の知らない形に変わる。

あなたは私の未練を終わらせられる、最後の希望なのです。

あの日にあなたを知れた事は私にとって幸運でした。

もし出会わなければ、私はずっとこの未練を抱えたまま生きる事になっていたかもしれません。

《ハレル、ちよつと世界を救ってみたいと思った事はないか？》

《無いですね、でもそれはそれで楽しいかもしれませんね……カガリ》

《なら今度やってみよう、きつとワクワクするぞ》

だから、行きましょう。

約束を果たしに。

† † †

第二の神殿、そこはまるで墓場の様な静寂を保っていた。

泉の神殿程には派手ではなく、もつともらしい神殿の形をしているが、心なしか風が強い様に感じる。

そしてそこに存在するのはまるで祈る様な姿勢で硬直した亡者だけ、第一の神殿の周囲みたくないな汚染もないし、亡者のワームの様な怪物もない。

第一の神殿の周囲は機能が回復した事で汚染が霧散し始めたが、まだしばらくは近づけそうに無かった為に後回しになった。

ハレルはとても残念そうな顔をしていたが仕方ない、いくら地面が見える様になったとはいえまだまだ闇が濃すぎたのだから。

その後は特に代わり映えのしない荒涼とした大地が続き、あっさりと第二の神殿に辿り着いたのだが……あまりに静か過ぎる。

「妙だとは思わないか？」

「思いますね、ただどっちにしろ入るしか選択肢はありません」

身動き一つしない亡者達の成れの果てを避けながら階段を登り、現れた入り口を見れば、何かが崩れ落ちた塵が積もっていた。

「先客か？」

「……でしょうね、我々以外の魔法少女もありえるし、そうでないかもしれないので。気をつけていきましょう」

「向こうが撃つて来たらどうする？」

「極力殺さない様にお願ひします」

「クルスクレイクはやったのにか？」

「アレはキルカウントに入りませんから」

まあアレも死んだ訳ではないが、種族も違えば在り方も違うからな。

一回しか生きられない相手だと死ねばそれで終わりだ。

「わかった、極力死なせないようにはしておくし、お前を死なせる様な事にもならない様には努力する」

「……ありがとうございます」

武器はサブマシンガンを選び、いつでも迎撃用のブレードを抜けるようにしておく。

この神殿は完全に動力が通っていないのか完全に暗闇に包まれていた。

オレやハレルの行動に支障が出るわけではない、が相手はどうかかわからない……やはり精神的に暗闇というのは緊張感を高め、いざという時にパニックを起こしてしまうかもしれない。

……と想定するが、結局の所この地獄みたいな有様の世界を切り抜ける程度の者が暗闇程度でパニックを起こすかと言えればおそらくNOだ。

それに暗闇に率先して突っ込んでいくのなら、間違いなく視界は確保できているだろう。

とはいえ、素材のせいかな音がやけに静かだ。

戦場の騒音の中から音を拾い出せるオレでもハレルと自分自身の音、そして風の音しか感じ取れないぐらいに。

「魔力の残留反応はありませんし、私達の世界の魔法少女や魔術師と言う線も微妙ですかね」

「わからないぞ、魔力が霧散しやすくなってるだけかもしれないし……フルステルスの可能性もある」

ステルス性に特化した魔法少女は少なくない、元よりレーダーなどで感知しにくい魔法少女はステルス性に優れている、それを更に突き詰めるのは当然でもある。

オレのサイレントインパルスもステルス特化だが、あくまで戦術ステルスであり、それ以上に高度な隠密性能を持ったモデルも知っている。

防衛の依頼では潜入や工作をメインとしたモデルとやりあう事もあり、その厄介さは身に染みてわかつているつもりではある。

「やっぱり妙ですね、この暗闇だつてそうです、他の神殿よりも明らかに光が足りてない」

「そういう作りじゃないのか」

「ここは「風の神殿」と呼ばれてたそうです、それにシルフィードはどう？」

『ソナーパルスでマッピングしています、神殿内には多くの隙間があります。外が薄暗いとしてもこの光量は異常と思われまます』

つまりは、この暗闇自体が何かしら、か。

オレ達は既に罠に嵌っているかもしれない。

思えばこれまで見た二つの神殿にはこれといった防衛機構といったものが無かった、恐らく最も重要とされそうな第一の神殿でさえもだ。

全ての感覚を限界まで研ぎ澄まし、異常を探す。

今の所、オレ達に直接的に危害を加えるようなものはない、敵意も殺気も悪意もない。『空間の異常は検知できません、時間の歪みも同様です、周囲に異常な物質が舞っている

訳でもありません。不明です』

シルフィードの性能でも不明か、ここははつきり言えば退いた方がいい。

別に光源の有り無しが問題なのではない、未知という状態が危険だという意味だ。

「……仕方ありません、出直しましょう……」

「それがいい」

ハレルも同じ判断をした、ならここを出る、それだけだ。

オレ達は振り返り、まずいと感じた。

『空間に異常を検知、閉じ込められたようです』

まだ入り口からほんの少ししか立ち入っていないというのに、オレ達の入ってきた入

り口が完全な「黒」に塗りつぶされていた。

「どうやら、私達を返したくないようですね」

「悪い、不覚を取った」

「大丈夫ですよナインさん、この程度よくある事ですから」

とにかく、オレ達はこの神殿を探索せざるを得なくなつたという訳か。

果たしてこの闇の中からは何が出てくるのだろうか。

chapter 4—02

外に繋がると思われる出入り口は全て黒く塗りつぶされ、神殿は完全な闇に閉ざされていた。

おそらくこれは本来の防衛機構ではない、何者かの手が加えられたモノであり、解決するには元凶を探すしかない。

この暗闇そのものはオレ達にとっては脅威とはならない、だが元凶とは別に居るかもしれない先客には注意しなければならぬ。

「とはいえ、こんな冒険をいつもやってたのか？」

「はい、いつもこんな感じですよ」

オレが気を張っている一方でハレルはまるで自然体、この程度の事では動じないのか、それともただ単に暢気なバカなだけか。

どちらとも言い切れないが、とにかく慣れてしまっただけはいるらしい。

『解析完了、この空間は外とは切り離されています』

「知ってますよ」

『ユニオンの二人の助けは期待できません』

「最初から期待してませんよ」

『切り抜ける自信が随分とお有りです』

「お前達は何をやってるんだ、まったく……で、他には何か？」

『はい、また法則がおかしくなっている為かソナーを初めとした各種センサーの効果が一時的に低下しています、十分に気をつけてください』

なるほど、また異界か。

となるとここにもまた別世界から来た住人が住んでると見てもいいかもしれない。

「ありがとうシルフィード、引き続き調査を頼む」

『わかりました』

「……ナインさん？私よりシルフィードを信用してませんか？」

「それはなあ……お前よりも素性がハッキリしている、それに自分の命を預けている道具を信じずして傭兵はやっていけない」

「作ったのは私ですよ」

「シルフィードは別だろう」

「まあそうですけど」

この時代に組織で制式採用されているかというのは判断基準としてはかなり堅実だ、性能だけでなくコスト・可用性・整備性も含まれるからだ。

可用性は大事だ、少しでも生存率を上げる為には特に。

「だがまあ、お前のことも信用はしている。その気が無ければ態々こんなところまでついては来ないだろう?」

「……どうして私の依頼を受けてくれたのですか」

「興味と……力だ」

「力……?」

「そうだ、お前が最初に見せた設計データ、このカーバンクルのコアに、対環境シールド、ライフル、お前が作る武器や道具、そして知識や情報に、オレはこれまで以上に強くなれる可能性を感じた」

オレはどうあがいても戦う事しかできない傭兵で魔法少女だ、その生き方しか知らない。い。

生き残る為には力が必要だ、それはきつと何処もいつの時代も変わらない、オレ達の世界も、この地獄と化した終末世界でも、力が無ければならない。

ユニオンの魔法少女、デーモンのクルスクレイク、この世界にはびこる巨大な怪物、そして、目の前にいるハレルもまたオレよりも強い存在だ。

別に最強である必要はない、だが誰にも踏みにじられないだけの強さが欲しい。

「自由に生きて、自由に死ぬ。それを叶える為の力が手に入るかもしれない、そう思った

からここまで来た、それだけだ」

少し喋りすぎた、だが今はまだルールとしがらみに縛られるだけの傭兵だ。

今は仕事を果たす以外に優先するべき事はないだろう。

話しながらも歩き続けているが事態は一向に改善しない、神殿とだけあってやはり広さが随分とあるのか廊下が長すぎる。

空間異常で無駄に拡張されている訳でも、無限に同じ場所を歩き回ってる訳でもなさそうなのは救いだが。

「シルフィード、今どれぐらい歩いた」

『移動開始から10分経過、移動距離400メートル程度です』

「少し立ち止まっていたからそんなものか」

『いいニュースです、500メートル先に熱エネルギー反応を検知しました。外見からのデータとあわせると神殿の丁度中心となります』

暗闇の性質か、まだ見通せないがどうやら何かはあるらしい。

本当にそれがいいニュースなのかはまだわからない。

「そういえば内部構造のデータは貰っていないのかハレル」

「ないですね、あくまで名前と位置……後は機能説明と権限ぐらいです」

「……はどんな意味を持つんだ」

「第一神殿から抽出されたエネルギーを加速して格神殿まで送信する役目だそうです。ここを起動すれば残りの5つの神殿全てにエネルギーパスが通る……と思われます」

向こうが動力炉とすればここは総合送電所か、他全部が同時にパスが通るとなると予備のラインが引かれている？

しかし、それにしてもそんな重要な施設だというのに神殿の警備は手薄すぎないだろうか？人間ではないだろうがこう……人の手で警備していたのだろうか？防衛システムの自動化などはないのか？

アライアンスの発電設備や工場設備は複数種の警備システムを導入しているし、ユニオンの施設も随分警備が手厚かったのが印象に残っているのだが。

しらばらく歩き、ようやく行き止まりに辿り着く、壁の様に見えるがそれは巨大な石の扉だった。

「流石に入り口からそのまま直通というのも変な話だ」

「第一の神殿すら流石に制御室は下層でしたからね」

「それで、これはどうやって開けるんだ？」

「見たところ制御コントロールも無いし、おそらく機能停止しているので……」
「わかった、オレがやる」

まあ神々がアレアステシアの様に人間サイズになるとは限らないし、扉を開ける

専門の番兵でも居たのかもしれない。

形状は両開き、問題はこいつを引っ張るのか、それとも押すのか、見たところドアノブはないし、床に引きずった跡もない。

「多分大丈夫だと思うので押してみてください」

ハレルに言われるままパワーアシストの出力を通常のまま両方の押し込む、まるで壁を押しているような感じだ。

だが徐々に出力を上げていけば間違いなく動いてはいるのでこれで間違いはないようだ。

隙間から空気が噴出し、ゆっくりと扉が開いた。

中々に重い扉だが、セキュリティ意識はやはり低い様だ、おかげで鍵を探すなどの手間は省けたが。

ついでに開けた途端に敵が襲ってくるなんてこともなくて助かった。

「大丈夫、そうですね。誰も居ませんし、熱源の正体は……この結晶の様です」

扉の向こうには緑色の結晶に覆われた祭壇があった、前の神殿でも見たコンソール迫り出したままだ。

「何の結晶だ」

『分析の結果、星のエネルギーが固化化したものと考えられます。かなり安定していま

すが強いエネルギーを加えると爆発する可能性があります、注意してください』
なるほど、星の欠片か……なんともロマンチックだ。

だが爆発する危険性があるとなれば話は別だ、どうしたものか。

chapter 4—03

制御室まで辿り着いたものの、コンソールを覆ってしまっているエネルギー結晶、これを除去しなければ話が進まない。

「それで、どうやって剥がすんだ？」

『物理的手段での排除も爆発の危険性があります。別の方法での対処を推奨します』

「とは言ってもな……ハレル、お前の意見は？」

「別に物理的に吹き飛ばしても大丈夫でしょう、機能停止していようと安全装置もないのにこんな巨大設備は運用できない筈です」

『私の分析では40%の確率でコンソールは破損し、最悪の場合この施設の崩壊を招くと考えます。危険です』

「外に逃げられない以上、吹き飛ばすのは無しだ。それよりも……この暗闇と空間異常の原因を解決して、結晶を退かす為の手段を探したほうがいい」

さすがに逃げ道もないというのに爆発や崩壊を招く手段は取る気にはならない、それも40%というかなりの高い確率だ。

異常の原因がどうしようもなかった時の最後の手段にするべきだ。

ハレルも本気でこれを吹き飛ばそうなどとは考えないだろう。

「ただ私として元凶探しよりは手軽だと思うんですがね……」

「四割の確率で吹き飛ばすのは手軽とはいわない」

訂正、こいつは割りと本気で吹き飛ばすつもりだった。

「もつと慎重にやるつもりはないのか」

「一々気を遣ってたら永遠に進めませんよ、多少強引な手段も時には大事だと思います」

「はあ……まあいい……とにかく、探すととなるとまた頼むことになるぞシルフィード」

『おまかせください』

本当に便利な奴だ、確かにこいつがいるだけで負担は半分減っている。

アライアンスやユニオンにも本格的に導入されれば魔法少女の運用もまた変わってくるだろう。

そうなるとネットワーク運用や魔法少女同士の電子戦まで考えなければならなくなる、が逆にスタンドアローンのままにしておくのも悪くない。

なににせよ、一人で戦うよりは遥かに効率的になるという事だ。

振り返り、元来た扉の方を向いたその時、空間の歪みを見て取った。

『時空の歪みが発生、何かが見れます。注意を』

即座にマシンガンを手にし、現れた黒い穴の様なモノを注視する。

そこから飛び出してきたのは蛇、いや竜だ。

口を開けて突っ込んできたそれをオレ達は回避する。

しかし現れたのは一匹だけではない、続けてもう二匹、こいつらには言葉が通じる気がしないとマシンガンの引き金を引いて動きを逸らさせる。

あわせて三匹の蛇竜が部屋の壁に沿うようにオレ達を囲んでいた。

「これが黒幕、という感じではありませんね。おそらく下っ端でしょうね」
「奇遇だな、オレもそう思う」

なるほど、全く感知できないのもその筈だ、こいつらは今の今までこの空間の中に居なかった。

空間の歪みや異常こそ検知できるが、別の空間や次元に隠れて何をしているかまではオレでもわからない。

しかし向こうは何らかの手段ですつとこちらの様子を伺っていたのだろう。
だがまあ……向こうも運が悪い。

「試し撃ちにはちようどいい」

クルスクレイクのショットガンに持ち替え、蛇竜に銃口を向ける。

「ナインさん、言いだしっぺはあなたなんですから結晶を爆破しない様にしてください
ね」

「わかつてる」

ぱっと見、蛇竜どもは透けており、オレからは空間の歪みそのまま動いているように見える。

『解析完了、複数の次元に同時に存在する為、通常の攻撃ではダメージが分散されてしまいます。しかし向こうも干渉の為にはこちら側に姿を固定します。つまりは向こうの攻撃にあわせてカウンターの形を取るのが有効でしょう』

シルフィードの分析を参考に弾丸を生成、貫通性能の高いモノを選ぶ。

そして一匹目の蛇竜が首をもたげ、こちらに飛びかかり、姿を現すのに合わせて引き金を引く。

強烈な衝撃と共に放たれた散弾が蛇竜の頭を粉々に吹き飛ばし、惨たらしく肉片へと変えた。

力なく床に転がり落ちる死体をかわし、二体目の蛇竜が突っ込んでくるのを回避しつつ二発目は「グレネード」弾を形成、開いた口の中に直接撃ち込んでやり、突進を回避。背後で風船の様に膨らみに吹き飛んだ仲間を見て、距離を取っていた三匹目は開いた口内を赤く輝かせる。

それは「ドラゴンプレス」だ、回避してもいい……が結晶に当たればまずいかもしれない。

脳内に流れ込む「取り扱い説明」を従い、オレは三発目の弾丸を生成。

竜の口から放たれた炎に真っ向からぶつける様に「闇」を銃口から放つ。

炎を掻き消し、邪竜を包んだ闇はその肉体を蝕み、生命エネルギーを食い尽くして

「塵」へと変えた。

「ナインさん、今のは」

「ダークエネルギー弾、というらしい……簡単に言えば生命に対する反物質で、命あるものには等しく効くそうだ」

「やっぱりロクなものじゃありませんね……それから次からそれを使うなら言ってくださいね？危うくナインさんを撃ちそうになりましたよ」

冗談だろうとハレルの方を向く、突きつけられた銃口は今なお青白く光っていて、オレは今まで見た事のないその表情と真剣さに思わず冷や汗をかいた。

「あ、ああ……そうするが、さすがにそれは過剰反応じゃないか？」

「……言っておきますが、あなたのその銃は正直に言って、私でも手に余る危険なモノです。それに今みたいな攻撃をするのに対価がないなんてありえません。シルフィード、バイタルチエックを」

『生命エネルギーが短時間で多く消費されています、特に三度目の攻撃は5%程の消失を検知しました』

「そんなにかな？ 実感は無いが？」

なるほど、命を削る武器か。

確かに強力だが、使い所を考えておかなければな。

「……基本的に私達の世界で生命エネルギーを消費する機会はありません、せいぜい肉体の衰弱にしたがって無くなっていくぐらいです。一部の魔術師や巫女なんかは生命を対価とする術式を使う程度でしょう、だから実感が湧かないだけです。わかりやすい所では私達のような巫女や魔法少女でも3割なくなれば動きに支障が出て、半分も無くなれば生命活動に支障がでます。なのでその武器は極力使わない様に」

「でも回復機能もついているぞ？ アンカーショット形態にすれば……」

「使用は控えてください、いいですね？」

反論しようと思ったが、流石に光る銃口を突きつけられては言えないな。

しかしハレルが何故こうも過敏に反応するのか、少し不思議に思った。